
懲りずにまた男の娘。ギーシュに憑依した変人の話

開店休業状態

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懲りずにまた男の娘。ギーシュに憑依した変人の話

【Nコード】

N9605R

【作者名】

開店休業状態

【あらすじ】

ゼロの使い魔のギーシュに転生した貴金属や宝石などの鉱物が好きな男が跳梁跋扈する話。

結構なレベルで好き勝手やって、挙句の果てにはカオスな状態に陥るお話。

具体的にどうだと言うと、主人公が男やめたり、人間やめたり、普通のメイジやめたり。

最終的にちんこついたお嫁さんになっちゃう話。

ちんこついたお嫁さんが嫌いな人は読んじゃだめだよ。

チートオリ主とかネタまみれのSSが嫌いな人も読んじゃダメだよ。
最後に言っておくけど、男の娘は作者のジャスティスだから絶対に
出てくるよ。

意地でも男の娘出すから男の娘好きな人は期待しててね。

プロローグ（前書き）

あんまり期待しないでください。誤字とかも多いです。
一気に掲載するので、話ごとのタイトルはそのうちです。

プロローグ

諸君 私は宝石が好きだ

諸君 私は宝石が大好きだ

瑪瑙が好きだ

瑠璃が好きだ

水晶が好きだ

翡翠が好きだ

紅玉が好きだ

蒼玉が好きだ

翠玉が好きだ

藍玉が好きだ

鋼玉が好きだ

平原で 街道で

塹壕で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上で行われるありとあらゆる鍊金行動が大好きだ

炭鉱夫をならべた坑道の一斉採掘が轟音と共に原石を掘り出すのが好きだ

空中高く放り上げられた原石が陽光にきらきらと輝いた時など心がおどる

選別師の操る手が大きな原石を見つけだすのが好きだ

奇声を上げて燃えさかる竈から飛び出してきた鉱石をブレイドでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

鶴嘴先をそろえた炭鉱夫の横隊が壁を蹂躪するのが好きだ
恐慌状態の炭鉱夫が既に掘り尽くした坑道を何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

俟約主義の貴族達を店の外に追い出す様なものはもうたまらない
泣き叫ぶ炭鉱夫達が私の振り下ろした手の平とともに採掘を開始するのも最高だ

哀れな抵抗者達が雑多な武器で健気にも立ち上がってきたのを私の作り出した80cm列車砲の4・8t榴爆弾が都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

トリステインのバカ共に滅茶苦茶に貶されるのが好きだ
必死に守るはずだった名誉が蹂躪され宝石が奪われていく様はとても悲しいものだ

ガリアの物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ
ゴーレムに追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は鍊金を地獄の様な鍊金を望んでいる

諸君 私に付き従う大隊盟友諸君

君達は一切何を望んでいる？

更なる鍊金を望むか？

情け容赦のない糞の様な鍊金を望むか？

根こそぎ採掘の限りを尽くし三千世界の鴉を瑪瑙に摩り替える嵐の

様な鍊金を望むか？

『鍊金！ 鍊金！ 鍊金！』

よろしい ならば鍊金だ

我々は渾身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする杖だ
だがこの暗い闇の底で十数年もの間堪え続けてきた我々にただの鍊
金ではもはや足りない！！

大鍊金を！！

一心不乱の大鍊金を！！

我らはわずかに一個大隊 千人に満たぬメイジに過ぎない
だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している
ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の鍊金集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう
髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開けさせ思い出させよう
連中に宝石の色を思い出させてやる
連中に我々の技巧の冴えを思い出させてやる

天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらない事があることを
思い出させてやる

一千人の魔法使いの鍊金団で
世界を鍊金し尽くしてやる

ふう……うん？お前は一体何がしたいんだって？そりゃあお前、鍊金だよ！原子配列変換だよ！ヴァルキリーなプロファイルだよ！正確に言えばゼロ魔の鍊金だけだよ。なんでいきなりそんな話をするかって？死んじやったからだよ。

テンプレどおりな神様が出てきて、特典をあげるから転生してくれて事らしいんだ。何処に転生すると聞けばゼロ魔。

それでさ、俺……宝石が好きなんだ。水晶球とか一日中見ても飽きない。水晶細工の薔薇を見たときなんか勃起しちゃったくらい。だから、大量の魔力。鍊金さえ出来れば、金属とか宝石の原子配列は完璧に覚えてるしね。俺の脳味噌は好きな事や興味のあることだけは全部覚えてるんだ。

という訳で転生した。流石にね、羞恥プレイはあれだから……魔法の勉強を始める頃に自意識が覚醒するようにしてもらった。

「ビックリするほどユートピア」

これが覚醒してから一番最初に言った言葉。何となく言っただけなんだけどね。んで、俺の名前なんだが……ギーシュ・ド・グラモンだった。

ギーシュだよ、ギーシュ。うん、ギーシュ。ギーシュなんだよギーシュ。なんだかゲシュタルト崩壊してきたわ。

五歳の誕生日に杖を渡されて、地下室に連れて行かれて契約しろ。どうしろっていうんだ。杖に心を向き合わせろ？無茶言うな馬鹿。しかし、閉鎖空間で気が狂ってしまいそうなので、杖に向かって怨念を込めていく。いけるっ！もうちょつとだ！いくぜおら！。

「よっしゃ！来たっ！勝った！これで勝つるっ！」

唐突に訪れたカタルシス（開放感）。まるで杖が自分の腕の延長のような感覚。不思議な感覚だった。まるで手に吸いつくかのような。いやっほう！と叫んでいると、家臣の一人が部屋に入ってくる。いきなり叫び出したので、なんかしたんか？という事らしい。

「契約が出来たよ！イヤッホォーッ！」

狂喜乱舞とはこの事である。途中で苦しくなってオウエツ！となるまで喜びまくった。そして、庭に連れ出される。

「さあ、魔法の訓練を始めましょう。まずは、レビテーションを唱えてくださいませ。自分の体を浮かせるのです」

というわけなので、事前に教えられていた呪文（という物コモンマジックは単体で発動する）を唱え、自分を浮かばせる。

やってみた感じだと、浮力が発生してるのと同時に、重力が遮断されてる感じがする。完璧に遮断し切れてないのを浮力で補ってる感じ。

「おお、お見事ですな。初めてで魔法を成功させるとは……将来的にはトライアングルも難しくはないかもしれませぬ」

スクウェアっていうのは一種のエリートらしく、トライアングルでも十分に才能があるらしい。んな事はどうでもいいんだが。

「さて、魔法自体は成功してらっしゃいます。では、次は全ての属性の基本……土ならば鍊金、火ならば発火という風に基本の魔法を使ってくださいまし。それで系統を見極めます」

というわけなので、四つの呪文を唱える。当然の如く、俺は土系統

のメイジだった。土じゃないと駄目だよな。神にだって土系統にしてくれって言ったんだし。

「フツ、フフツ……青銅だ」

「見れば分かります」

「そうだね」

なに言ってるのコイツ？って感じで見られてしまった。ちくせう。俺の素晴らしさを見せてやろう！

「イル・アース・デル！錬金ッ！」

気合を込めて原子配列変換。見るがいいっ、錬金が世界を席卷するであろう魔法だという事を！

拳ほどの大きさがある石に向かって、気合の限りを込めて杖を振りかざす。金の原子配列を。金の結晶構造を思い浮かべながら。

そして、一瞬の後に、石は眩く輝く金属へと変化した。原子配列変換が出来るとは……魔法とはなんとも素晴らしいものである。

「フツ、フハハハア！見ろお！面心立方構造の美しき光沢を！素晴らしき金属の輝きを！これが純度99・9%の純金だあああ！」

そういいながら、俺は気絶した。

第一話

目が覚めた時、既に二週間が経過している事に驚いた。あと、自分の中にある魔力の量にも。

何でかという、一気に魔力が増えていたのだ。アレか？限界を超えた運動をする事による超回復って奴。

しかし、筋肉なら三日程度なのに、魔力はそれ以上か。大変だな。超回復よりも地道に増やした方がいいかもしれない。

そんな事を考えていると、目の前にいる親父殿がなにやら興奮している事に気付いた。ナルシスって名前らしいぜ。すっげえ名前。

「聞いているのか!？」

「聞いていません」

「聞けっ!」

「聞きます」

「金を錬金出来るのはスクウェアメイジのみ!しかし、お前は魔法を練習し始めて一日目だというのに金を錬金した!これがどういう事か分かるか!」

「分かるわけないでしょう」

「それもそうだな!」

「簡潔に事実だけ教えてください」

「うむ。お前の精神力はドット。しかし、スクウェアにしか出来ぬ錬金をした。つまり、お前は錬金に特化したメイジだという事だ！」
短絡思考が過ぎるぞ。

「更には純度も高い！アレは二百エキュールで売れたぞ！」

売るなよ。いや、うちが金に困ってるのは知ってるけどさ。

「しかるに、お前は戦闘には向いておらん。戦闘の訓練はしなくともよい。魔法の、錬金の腕を伸ばせ！お前は素晴らしいメイジになる！」

つまり所、頑張ってお金を稼いでね！そういう事らしい。まあ、彫金も出来れば稼げるだろう。

それに俺は戦いたくないでござるな人種なので、そっちの方がよっぽどいい。

「それでは、今から魔法の勉強をします」

「おお！熱心なのはいいことだ！頑張るがいい！」

そんな事を言いながら、マントを翻して親父殿は出て行った。声がデカイ人だな。

まあ、んな事はどうでもいいので、杖を持って、そこらを見渡し、適当な大きさのペーパーナイフを見つけたので、それを錬金。

構造的にモノを切ることが出来るほどの強度もないし、人肌を切れるほどの鋭さもないが、錬金で刃をつける。

指先を触れさせただけで、指先が切れてしまうほどの鋭さになったので、少し刃を鈍らせる。これでよし。

その後は外に出て、木の中から炭素を抽出し、それをダイヤモンドに変換する。やっぱりだな。原子そのものを変換するより、原子配列変換をする方が楽だ。

とはいえ物の、ダイヤモンドの原子に変換したとしても、それで成功するわけがない。一瞬にしてダイヤモンドは炭素の塊に変化する。今度は超高圧にしての人工ダイヤモンドの製造過程を思い出しながらやると、見事に成功。ブリリアントカットは知らないので、ただの塊だ。

「そして今度は……」

限界まで刃を薄くしたペーパーナイフにダイヤモンドで鍍金する。ダイヤモンドカッターである。

射程距離五十センチの投げナイフで木に向かって投げると、非力な子供の力でも、さっくりと木に突き刺さる。素晴らしい！

「今度は……」

杖を振り、木を変化させる。木の原子構造をダイヤモンドの結晶構造に変化させるように思い描き、製造の工程を描いていく。

バチツと音が鳴り、変換の成功を確信する。ゆっくりと目を見開き……。

「おふわっ！」

咄嗟に鍊金で原子構造を分解させる。目が焼けるかと思ったぞ。木端微塵に砕け散ったダイヤモンドが雪のように降り注ぐ。

これが本当のダイヤモンドダストである。粉になって飛ぶと危ないので、鍊金で固める。うーむ……何千カラットあるんだ？

ひとまず、丸い塊にして、表面を石で覆う。これでただの丸い石だ

ろう。不気味なまでに丸いな。蹴ると簡単に転がっていく。

「さて……」

そこらの石を拾い集めて、ディテクトマジックで含有成分を調べていく。どうやらだが、鉄が多いっぽい。

他にも調べていくと、ここらへんの石は鉄の含有成分が多いことがわかった。片っ端からそこら中の石から鉄を抜き出していき、塊にしていく。リンや硫黄などが混ざらないように気を使いながら。

凡そ二百リール（百キロ）程の塊になった純鉄を切り取り、十リール程度の純鉄に炭素を混ぜ込む。全体に均一になるように凡そ一パーセント程度の炭素を混ぜ込む。

そして、炭素の含有量の違いによって出た硬度。粘りが強く、刃に向く玉鋼を刃金とし、心には中間程度の含有量の金属。側面には硬度の高い鋼を組み合わせていく。

刃は鋭すぎず、粘り強く、それでいて剃刀のように研ぎ澄まされた刃へと変換する。そして、刃を逸らせる。斜めに振り下ろし、ただ振り下ろしただけでも引ききる形になるように。

「う、美しい……」

三尺四寸の刀が完成する。陽光を受けて煌くその刀は美しかった。鑑賞の為につけられる刃紋なんぞつけない、ただ人を切るためだけの刀。

俗に言う人斬り包丁。流石に重くて持てなかった。しかし、作った方がいいが、どうしようか？切れ味を上げる為にダイヤモンドでコーティングするか？

してみたら刃がヤケに輝いた。とはいう物の、人斬り包丁は殺すための武器。華美な装飾など必要はない。という訳で、白木拵えで終了となった。

既に魔力も殆ど空っぽ。疲労困憊といった様子で俺は屋敷に戻る。人斬り包丁は大事に抱えて部屋に持っていく。えへへ、僕の人斬り包丁だ。

「疲れた。激しく疲れた。精神力がもっと欲しい」

今の俺はドット。他のメイジに比べれば高効率の錬金が出来るといえども、結局はドットメイジ。早くスクウェアになりたい。

今日は限界ギリギリまで精神力を行使した。なら、特典としてもらった大量の魔力に成長するだろう。多分だけど、既にラインくらいはあると思うんだよね。

そんな事を思っているうちに、俺は何時の間にか眠りについているのだった。寝ている間にメイドさんに体を拭かれるとか恥ずかしいっ！

「おはようございました」

メイドに起こされ、服を着替え、家族の皆で食事を取ります。正直な話、ブリミルに捧げる祈りなんぞありません。

「して、どうだ。ギーシュ。魔法の練習は」

「昨日始めた練習がそう上手く行くはずありませんわ」

微笑みながら正論を言う母殿。そりゃあ昨日始めたばかりの魔法がいきなり上手くなるわけがない。

「図書室の本にあった剣を作る練習をしました。形は上手く出来たのですが、切れるかは分かりません」

「ほう。して、何で作ったのだ？」

「鉄です」

「鉄か。うむ、金を作れるのだ。鉄が作れてもおかしくはあるまい！」

ちなみに鉄はラインから。正直な話、合金である青銅がドットで、鉄がラインだというのはおかしいだろうに。実際は炭素とか混じってるんだろうけど。

そもそも、青銅は酸化しないと緑色にはならないのだ。だったら緑色に錬金するのはわざわざ酸化させているのだが、鉄を作るよりも遥かに難易度が高い気がするのは気のせいかな。

「その調子で頑張れ、ギーシュ」

「はい」

そんなこんなで朝食を終えた。そして再び魔法の練習。昨日作った方がいいが、精神力がなくて運べなかった鉄の塊を誰かが気付くようにそこらに捨てておく。

錬金で思い出したのだが、焰の錬金術師は水素を化合させて爆発させていた。ならば、俺も似たような事が出来るはずだ。

「錬金！」

空气中に水素を精製。固まるように意識して、そこへと発火。する

前に、大爆発が起こるのでやめた。

こんな事をして仕方がないので、今度は遠くに行こう。今日はまだ見ぬ新しき金属を、宝石を求めて旅に出るのだよ。原子変換で作ってもいいんだけどね。

そんな訳でフライで飛び出し、山際に到着。鉱脈でもあればいいのだがな。ディテクトマジックをあちこちにかける。

「来たっ！ やった！ これでかつる！」

見つけたのは石英。含有量が高い。恐らくは鉱脈があるのだろう。錬金でじゃんじゃか穴を掘り、水晶を大量に集めていく。

既にラインにまで成長していた俺に不可能はない。二メートル四方の立方体の水晶が幾つも完成し、外に運び出していく。

魔力がめっちゃ増えてるな。三百リール程の水晶が採掘し終わり、水晶といえばアレを作らないといけないので、作ってみる事にした。

「……よしっ」

水晶髑髏☆流星にロウソクの火を当てると紫色に光ったりはしない。しかし、ネットにあったように不純物が一切混じってないから、不気味なまでに髑髏だな。

いっその事全身骨格を作ってやり、各部は水晶で作った螺旋などで止める。うわあ、不気味い……ゴーレムを動かすように動かすと、凄いい気持ち悪い。

何となく演劇ごっこをする。二つ作り、オフレコは俺。

「ああ、ロミオ。貴方は何故ロミオなの？」

「アイテムなぞ使ってんじゃねえええええ！」

「どうしてあなたはロミオなの？私を想うなら、あなたのお父さまをすてて、お名前を名乗らないでくださいな」

「クズがっ！微塵に砕けろっ！破滅のグランヴァニッシュ！」

「もしそうならならなら、私への愛を誓って欲しいですわ」

「貴様等あ、俺の最高のおもちゃだったぜっ！」

「そうすれば、私はキャピュレット家の人でなくなりましたよ」

「貴様等でも、俺の渴きを癒せはしないというのかっ！」

はい、間違っている所を探してください。簡単ですね。さて、精神力も減ってきたし、戻るとしようか。

水晶骨格模型で残った水晶の塊を持ち上げさせる。お、案外上手くいったな。砕けるかと思ったんだけど。

という訳で、足腰を鍛える為にも歩くでしょう。山を登るのに必要だったりするしね。

キングクリムゾンしました。

というわけで、家に到着しました。鉄の塊は執事と親父殿が検分をしていた。そこへ水晶を担がせた髑髏を動かす。

「むっ、何者!？」

「ゆ、幽霊でしょうか？」

杖を構える親父殿に、俺の魔法の教育係でもあった執事が杖を構え

る。それを無視して、ゴーレムを歩かせる。

「と、止まれっ！止まらぬかっ！」

恐慌状態になりながら、呪文を唱え始める親父殿。壊されては堪らないので、茂みから出る。

「なにをしているのですか？父上」

「おお、ギーシュ！危険だから下がっていなさい！」

「何を言っているのですか？それは私が作ったゴーレムですよ？」

「は……？」

「いえ、ですから、それはゴーレムです」

「そ、そうだったか。うむ、そんなのは私にもわかっていた。うむ、迫真の演技だったろう」

うわぁ、流石にそれはないって……。

「それで、どうしたのですか？父上」

「うむ。唐突に昨日まではなかった鉄の塊がここに現れてな。それの検分をしていたところだ」

「ああ、それは昨日、魔法の練習で作ったものです。売っ払って家計の足しにしてください」

「そうか！やはりお前は天才だ！して、そちらのゴーレムはどうした。見たところ水晶のようだが」

「ええ、そのとおりです。水晶が含まれた石から純度の高い水晶を錬金しました。これで細工を作るつもりです。出来がいいものがあったら、売ってください」

「うむ。分かった。これならば……」

うち、貧乏だからなあ。クルデンホルフに金借りてて、何万エキューの借金があるんだか……百万は行ってないと信じたい。

「うむ！これからも魔法の練習に励みなさい！」

「はい」

それだけ言うと、俺は髑髏を操って自分の部屋に水晶を運び込む。俺の部屋の扉に入らなかったので、錬金で分割する。

「さて、と……」

限界まで薄く。ひたすらに薄く。可視化できないほどにまで薄く。ただただ薄さだけを求め、錬金する。

完成した超極薄の刃。それに分子結合を強化する固定化をかける。そりゃあもう、ただただひたすらに固定化を掛け捲ってやる。

完成したのは目に見えない刃。そりゃあもう暗殺にピッタリな剣です。形状はなんだろう。冒険王ビートのアレで。

振るっても目に見えない刃。しかも薄いから軽い。一回切ったら割れるんなら、SAGA2で、何回も使えるならオーフェンなんだがな。ガラスじゃないけど。

中央はちゃんと切れないように丸い水晶でコーティングしてある。目に見えない剣とか危なすぎるな。思いつき蹴って、足を痛める。いてえ、割れるよ。

まあ、いいや。壊せないなら、危ないから壁にかけとこう。さて、次は水晶細工。これがやりたくて水晶を探してたんだからな。

「二酸化珪素は素晴らしい……ふつくしすぎる」

近くにあった薔薇を見ながら、水晶を錬金する。透明感がある事を覗けば、完璧に普通の薔薇だ。すげえ。魔法最強過ぎる。

紅水晶と翠水晶で作った薔薇。煙水晶で作った花瓶に何本もの薔薇を差し込み、見本として置いてある薔薇と全く同じ形になるように錬金。手本があると、イメージで形を作れる錬金最強。

「すげえ、これはすげえ。最早本物にしか見えない。最強過ぎる。蒼い薔薇とか最高。ふつくしい」

どっちかというと水色に近い色にした水晶で作った薔薇最高。美しい。蒼薔薇の水晶細工美しすぎワロタ。

「よし、次は何にするかな」

水晶はまだまだ余っている。しかし、精神力は結構減ってる。だが問題なし。今朝は早くに出たから、まだ午前なんだぜ。

昼まで休むとしようかな。というわけで、お休み。おはよう。もう昼です。ご飯を食べました。美味しいです。頑張ります。

精神力は結構回復した。回復速度も早いとかチートだろこれ。という訳で、また部屋に戻って、何か作ります。

「そうだ、人形を作ろう」

ゴーレムを作るにしても、女性用甲冑とかダサイ。あれじゃあ駄目だね。ダメダメ。もっと美しくない駄目。

そう、女性的な美しさ。スレンダーな女性。それで居て、強い。そして神秘的な雰囲気だが、背徳的な雰囲気……いいのがあるじゃないの。

という訳で錬金錬金。人体との親和性を考える必要はないので、水晶で骨格を作る。衝撃には弱い、人力で折れるほどの弱さではないし。

そして人工筋肉を気合で錬金。これで精神力が空っぽになった。流石に専門外の筋肉は無理だった。カーボンナノチューブを使うことは知ってたんだが。

製作を明日に持ち越し、二週間かけて全身分の人工筋肉を生成し終える。ディテクトマジックがどんな用途にも使えてチートすぎる。

そして各所に錬金で融合させ、滑らかな動きを再現。水晶に圧力を加えることによって発生する電気によって動かすのだ。これには苦労した。何しろ一ヶ月も掛かった。でも、どうやって電気を発生させよう。そもそも発生する電気で動くか？

黒い筋肉がついた不気味な骨格模型に、流動性のあるゲル状の液体を入れる。ぶっちゃけた話、緩いゼリーである。これも作るのに苦労した。人肌の柔らかさを再現するためだ。

そして人工皮膚を貼り付けていく。色白な母上の肌をイメージして作ったので、案外簡単だった。未だに目玉や口の中身がないが、マネキン程度の完成度だ。

眼球は紫水晶を使った義眼。これは別に動く必要はないので簡単だった。舌は悩んだ。結果として厚い人工皮膚の中にゼリーを入れた。髪の毛は錬金で造った銀を髪の毛の細さにまで細くし、頭に植え付けた。固定化して千切れないようにするのが大変だった。一本一本やるとか気が狂う。屋敷のメイジにも頼んだ。

髪の毛を気合の限り移植し続けた。爪は水晶。歯は動物の歯を引っ

こ抜いて、人間の歯の形に鍊金した。歯並びいいね。

服も鍊金で作った。防刃をしてあるので、戦闘もこなせる。上手く電気を発生させることが出来れば、同じ体型の人間の三十倍以上の筋力があるから脅威だ。

普通のゴーレムよりも遥かに強いのだが、問題は動かし方である。そもそも、人間と同じように動かせるのか？というか、俺はなにをやってるんだ？

しかし、単純にゴーレム操作で動かした所、人工筋肉がちゃんと動いたのだ。考えてみれば、内部の水晶の骨格が動けば筋肉が動くんだ。当たり前だった。

ゴーレム操作というのは滅茶苦茶に難しい事をしているのに、操作は簡単だ。自動操縦も出来るのだから、便利すぎて涙が出てくる。

「うーむ。ここまでくると、喋る機能が欲しいよな」

流石に無理だよな。声帯をどうやって作れと。まあいいや、喋れないのが当たり前だし。そもそも、こんなのを作るなんて変態だけだ。ああ、俺ってば変態。頭がおかしいくらいに変態。何で俺こんなゴーレム作ってんの？バカなの？死ぬの？

しかも、作業で魔法を使いまくったため、既にスクウェアクラスにまで進化しているのだ。うははは、俺ってば凄い馬鹿。

ゴーレムの製作を行っていたことは、父上達にも教えてある。今日こそお披露目してやろう。白い目で見られたって構わない。俺は俺の道突き進むぜ。

「で、ギーシュ。お前のゴーレムは何処だ？」

「これです」

「人間ではないか」

父上が見たので、首をかしげる仕草をゴーレムにしてみせる。すごいだろう。何しろ瞬きすらするんだからな。

「いいえ、ディテクトマジックを使ってみてください。これは人間ではありません」

「ふむ……おお、本当だ……骨格は水晶に、肉はなんなのだ？肉のようで肉ではない……」

「はい。人間の体の肉は、燃やせば炭になるでしょう？ならば、燃やせば炭になる鳥などと同じ。なので、動物の肉を使って作ったのです。とても強い力を発揮します」

「ほう……して、何体まで作れる？」

「実は……強いゴーレムを作ろうと思って作ったので、これ一体を作るのに一ヶ月は掛かります……」

「戦いには使えぬな。だが、身を守るのには十分だろう。何しろ人間としか思えぬ出来だ」

だろうな。だって、筋肉を限界まで詰め込んだから、この体つきで一も近い重さを持つ事が出来るのだ。骨格が耐えられないかと思うが、そこは固定化と硬化の魔法でなんとかなった。

固定化を掛け捲ってやった結果、意味不明なまでの強度になったのだ。何しろ水晶球を握りつぶして見せたからな。

三日かけて全身に固定化をかけてやり、世界が滅んでも残っているような強度になった。もう、駄目かも分からね。

「名前は水銀燈です」

「ほう。変わった名だな？」

「東方の言葉で、気高いを表すそうです」

ごめん。嘘。

「そうか。して、何故薔薇を持っているのだ？」

「これですか？これは絶対に枯れない薔薇です」

「固定化でもかけたのか？」

「いいえ。これは水晶です」

「ほう……確かに」

ディテクトマジックでようやく分かるほどの精度だ。色の配合やらなんやらに気違い染みた苦勞をさせられた。

これも売り払うのだ。既にクルデンホルフの借金も四分の一になったらしい。毎日のように水晶細工を売り払いまくっても全然減らない借金って……。

「見事だな……まるで香りまで漂ってきそうだ」

水晶細工は毎日のように作ってるしね。この程度、俺に出来ないわけがない。

第二話

自重しないゴーレムシリーズ。まあ、所謂ローゼンな人形ですな。水銀燈は三ヶ月掛かったが、これからは月に一体のペースで作れる。精神力を限界寸前まで行使していいなら、一週間程度でも作れるが。しかし、まだまだ成長を続ける魔力には恐れ入る。

家族にはライン程度にしか成長してないという嘘を言ったが、既に地面を流動化させるというスクウェアアスペルを使える。ゴーレムなら五十メートルのゴーレムだって作れるぜ。

俺は何処まで成長するのだろうか。まあ、そんな事はどうでもいいや。俺は自重なんかしないぜ。

という訳で、次は執事を作る事にした。執事といえば、黒執事。だが、俺はそんなものの知らんのでウィンフィールドを作る事にした。骨格は父上の骨格を参考にし、細めの筋肉にした。高速のボクシング最強伝説を教えてやるぜ。

そんな事を考えながら、製作をしているうちに、いい加減嫌になって投げ出した。ひっそりと佇む骨格標本が不気味。これからは水晶細工の時代だ。

水晶で作った時計が五千エキュで売れたりして、細工が楽しい。けど、いい加減細工の値段が暴落しそうなので、別のものを作る事にした。

鋼は高く売れるが、量を作らなくてはいけない。なら、新しい金属を見つければいい。という訳で、アルミニウムを作った。電荷処理が錬金で出来るとかありえねえ。

これが売れた。売れに売れた。軽くて加工が容易で丈夫。しかも綺麗。金よりも高値で取引されるようになった。見た目は銀に近いが、軽いので軽銀と呼ばれる。

これで結構儲けながら、水晶細工は趣味でやる事に。自分の部屋がどんどん水晶で埋まっていき、やがてはタンスなども黒水晶になっ

ていた。

ベッドのシーツとか、絨毯は流石に本物だが、壁に掛かってる絵まで水晶で出来てる。サンドアートという奴だ。俺の部屋が水晶だらけだ。

次は本物レベルのシェンロンを作ろうかと思っていた頃、唐突に園遊会に参加しろといわれた。今年で十歳だし、少し早いくらいだろうか。

これが社交界デビューか。面倒くせえと思いつながらも、使い魔を連れて行っていいなら、ゴーレムをつれて言ってもいいだろうという理論で水銀燈を連れて行く事に。

手ぶらもなんなので、時間もあるし、献上するための品でも作ろうと思う。そこで目に入ったのがウィンフィールド（になる予定の骨格）。そうだ、別の人形作ろう。父上にも水銀燈を操作してもらったから、同じように使える事は確認済み。

という訳で、父上に暫くは姫君に献上する品を作るので、水晶細工は休ませろといったら簡単に了承してくれた。よし、二週間しかないが、いけるだろう。

髪の毛をどうしようと考えていた頃、金で作った髪の毛もあったので、それを使う。という訳で、早速工程開始。

体の筋肉はしなやかながらも強く美しい肉体を。水晶の骨格の芯に、勿体無くて使えなかった龍の骨を組み込む。姫様に献上するなら安いもんだ。

ウィンフィールドの骨格から筋肉を引っぺがし、骨格に貼り付けていく。身長が150センチ程度になる事をしっかりと考えながらだ。瞳は翠水晶を使った義眼。他の部分は水銀燈と同じ。体型は女性というより少女らしく。アンリエッタ姫殿下の傍に居ても問題のない人形を。

肌は水銀燈よりも少し黒くした。色白だが、健康的な肌色に。傭兵の女性に協力してもらい、筋肉のつき方を調べて筋肉をつける。試作した剣を傭兵に報酬として渡し、剣の構造を煮詰めていく。無

骨ながらも優美で、切れ味よりも強度を優先した両手剣。

素材には水晶を抽出する際に出た、チタンを使う。取っしておいてよかったチタン。表面にはダイヤモンドでコーティングを施し、最高の切れ味を。

衣装にも凝った。防刃を施し、ドレスのようだが戦闘に耐えうる服を。筋肉の表面に金属で作った膜を作る。これでそう簡単に筋肉が切られる事はない。戦闘も完璧。

チタンで作ったプレートメイルを使い、表面には獅子の紋章。美しく強く。それを体現した女性。そう、セイバーだ！

これで完璧である。運ぶのも歩かせればいい。俺天才じゃね？フハハハ、これでよし。製作が完了したのは園遊会の一日前だった。ギリギリだったね。

ギリギリながらも何とか完成させ、セイバーが剣を持っているのは流石に駄目なので、水銀燈に持たせた。骨格を固定すれば直立くらい訳ないぜ。

「おお！グラモン元帥ではないか」

「おお、モンモランシ伯爵か」

このラグドリアン湖に住む、水の精霊の交渉役だったモンランシ伯爵である。床が濡れるから出てけというところでもない事を言ったから当たり前だが。

しかし、領地経営が上手いわけでもないのです、財政面で四苦八苦してるそうだ。頑張れ。

「そちらが羨ましいな。また借金が嵩む」

まあ、俺の事だわ。うちの軍人馬鹿は資金面のことなんぞ考えてないからな。馬鹿ばっか。

俺が居なかったら、貧乏な生活をするしかない常態だ。所謂武士は食わねど高楊枝という奴だな。

「で、その子が？」

「ああ。四男のギーシュだ」

「ギーシュ・ド・グラモンと申します」

習ったとおりに挨拶する。めんどくせえ。歩きたくねえ。しかし、フライで飛ぶわけにもいかんし。

早く帰って水晶を愛でたい。俺には二酸化ケイ素類を愛でるという崇高な使命があるのだ。二酸化ケイ素類最高。

部屋の水晶細工に思いを馳せ、しまりのない面をぶら下げていた俺に父上から声が掛けられる。

「そろそろ行くぞ」

「はい」

この園遊会の主催である王家に挨拶をせねばなんのだ。そこでこの品を献上すると。ちなみにセイバーは直立不動で布に包んである。そんな訳で、アンリエッタ姫に会う。俺の食指は動かん。俺としてはショートボブよりもロングヘアが好きだ。

「このたびはご招待に預かり、光栄でございます」

礼儀に則った挨拶をする親父殿。俺もそれに習って挨拶をする。後ろの水銀燈はセイバーを抱えているので動けない。

「ギーシュ・ド・グラモンと申します」

面倒だが名乗る。わざわざこの為だけにセイバーを作ったんだ。なんでセイバーを送るかといえば、王家の心象をよくするためだ。

「聞けば姫様と同じ年だとか。それでいながら、素晴らしい水晶細工を作るといふ評判ですな。更には優れたトライアングルメイジであると」

「いえ、私はただ鍊金にしか脳がないだけです。戦いの才能はありませんので、家を支える為に」

「ほお、ご立派ですな。グラモン元帥も立派な息子を持って誇らしいでしょう」

「ええ、出来た息子です」

こういうのってメンドイな。俺はただ、水晶細工を作って暮らせればいいよ。一生遊んで暮らすんだ。

戦いは嫌いでござる。それに、働いたら負けだと思ってるし。水晶細工は趣味の一環。

戦いになれば、一応戦う事は出来る。アースハンドを改良して、アースブレイクという魔法を作った。水晶の針が飛び出すのだ。普通に死ねる。

後は土を飛ばす魔法だが、これを水晶とかダイヤモンドでやるのだ。普通に死ぬ。他には五十メートルのゴーレム作って攻城戦とか。

「姫様に献上する品として、私の最高傑作である品を持ってまいりました。受け取って頂けるでしょうか？」

「まあ、なんですか？」

まあ、水銀燈が持っている物だという事は分かってるだろう。

「気に入っていただけると嬉しいのですが」

水銀燈を操作し、包みを置いて、包みを剥がす。そこにはプレート
メイルを纏った剣士が居た。

「人間……ではありませんね」

水メイジだからか、水の流れが無い事から即座に人間ではないと判
断する。

「これは、ゴーレムです。ひたすらに人間そっくりになるように作
り上げました。姫様でも操作できると思います」

動かすように促すと、セイバーが歩き始める。ゴーレムを使ったこ
とがないからか、流石にぎこちない。

「そちらの女性も、私のゴーレムです。まるで人間のようでしょう
？」

「ええ、本当に。素晴らしいわ」

「これならば、姫様の傍に居てもおかしくはないでしょう。ですが、
戦闘には耐えうるのですかな？」

「それはモチロンです」

持ってきておいた水晶球を取り出し、マザリーニ枢機卿に本物であることを確かめさせ、父上に全力で握ってもらう。当然壊れない。それを水銀燈に渡すと、笑顔のまま水銀燈が水晶を握りつぶす。破片になった水晶を全力で投擲し、遙か彼方にすっ飛んでいく。

「素晴らしいですな……」

「そちらのゴーレムは戦闘用の調整もしてあるので、私の水銀燈よりも力は強いですよ」

「本当に凄いわ。まるで、お友達が出来たみたいね。名前はあるの？」

「はい。セイバー・レオンハートと獅子のように勇猛でいて欲しいという願いを込めています」

「いい名前ですわね」

ひとしきり賞賛された後、お気に召さなかったときの為に持っていたネックレスも渡す。サファイアやらルビーやらをふんだんに使った品だ。軽く一万エキュースはする。

それもたいそう気に入ったらしく、お手を許された。唾でも吐きかけたるか。と思ったが、素直にキスしておく。やれやれだぜ。

そんな事を思いながら、ここはモンモランシ領なので、何かいい鉱石でもないかと思って歩き出す。ウランとかないかな。王家に献上して放射能で全員殺したるか。

まあ、流石にそんなものが地表にあるわけもなく、普通に水晶とかばかりだった。強いて言えば、チタンの含有量がうちの領地よりは多いくらいか。

石切でもしようと思い、そこらの石を投げやすい形に鍊金して投げ

る。三回くらいしか撥ねないな。水銀燈にやらせたら、対岸まで飛んでった。五十回は撥ねたな。

そうだ、チャクラム作ろう。今度は目に見えない剣じゃなくて目に見えないチャクラム。いいね、最高。という訳で、早速作った。

「いけっ！モーターギアの武装鍊金！」

しまったあ！目に見えないから使い捨てにいいい！木を切断してどこかに飛んでいったチャクラム。誰かに当たらないように祈ろう。まあ、向うは人家もない草原だから大丈夫だろ。

よし、今度はバルキリースカート作ろう。水銀燈の固有武装が欲しいからな。俺はシルバースキン使うわ。

という訳で、早速鍊金鍊金。稼働部のアーム強度についてひとしきり頭を捻らせ、チタンを集めようと考え付く。チタンで作ればなんとかなるだろ。

ここはうちの領地よりもチタンが多いし、力持ちな水銀燈だっている。まあ、一日中チタンを集めても一キロいくかないか位しか集まらんけど。

地面をゴツゴツと抉りながら、チタンと珪素を抽出し、チタンを固まりにして掌に持っておく。水晶は水銀燈に持たせておく。

延々と作業を続け、人間をやめなくなる作業だと変なことを考えていると、何時の間にやら目の前に俺と同じくらいの少女がいた。

ありえない色をした髪だよな。ピンクブロンドなんだが、これって色素異常症ではないのだろうか。

「なにをしてるの？」

「浪漫武装を作るための材料調達」

「浪漫武装？」

「そう、臍物をぶちまけろとか、脳漿をぶちまけろっていう感じの」

「臍物？脳漿？」

やっべ、物騒な言葉を教えてしまった。どうしよう。ここは物で誤魔化す作戦。

という訳で、一端穴を埋め戻し、水銀燈が手に持つ巨大な水晶柱から鍊金で切り離し、紅水晶で鳳凰を作る。掌サイズだが、高値がつくぜ。

「ほら、これを上げるよ」

「凄い……ありがとう。それで、臍物ってなに？」

作戦失敗！

「臍物って言うのはね……ダレでもおなかの中に持っていて、なくなると大変なものさ」

「そうなんだ……」

僅かな部分を言っただけだ。嘘じゃない。これで大丈夫だろ。

「脳漿は頭の中にあるものさ。ハハッ、それじゃあね」

早く逃げたい。俺にはチタンを集めるといふ崇高な思念があるのだ。誰かチタンの鉱脈を知りませんか？え？月にあるって？取りにいくか。

「待って！私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。貴方の名前は？」

名乗られたら名乗らないわけにはいかんです。貴族のバカヤロウ。

「俺はギーシュ・ド・グラモン……覚えなくてもいいよ。うん」

それだけ言うと、俺は逃げた。明後日への逃走さ。うん、原作キラと関わるとは。しかし、美少女だったな。嫁さんに欲しいわ。そんな事を思いながら、あちこち歩き回った結果、二キロほどのチタンが集められた。いやっほう大量だあ。

時は移り。園遊会が終わった翌日のヴァリエール家。

「わあ……凄い綺麗……」

日に透かす事により、内部で偏光した光が翼を燃えるように輝かせる鳳凰。無駄に芸が細かい男、ギーシュの作品である。

ルイズは昨日であった少年に貰った鳳凰をあきもせず眺めていた。見た事もない不思議な鳥だが、神々しさを感じさせる造形。

まるで今にも飛び立ちそうなほどの活力を感じる。羽の箇所によって、水晶の色を僅かに変え、まるで燃え立つかのような錯覚を覚えさせる。

固定化もしっかりとかけられ、自分と同じ位の年齢の少年が作ったとは思えない品だった。

「うん？ルイズ。何をしているのだ？」

窓際できらきらやっていたいれば、家族に見つかるのは当たり前。ヴァリエール家の頭首である、ヴァリエール公爵だった。

「この水晶細工を見ていたの。ほら、まるで翼が燃えてるようですよ？」

「ほお……素晴らしい細工だな。高かったろう。何処で買ったのだ？」

「いえ、貰ったんです」

「貰った？誰にだね？」

「確か、ギーシュ・ド・グラモンと言っていました」

それを聞いて噴き出す公爵。ギーシュといえば、素晴らしい水晶細工をする事で有名な土メイジだ。当年とって10歳だというのに、既にトライアングルメイジだとか。

しかし、最近は水晶細工を作らなくなり、ギーシュの水晶細工の値段は高騰していた。薔薇の水晶細工がなんと八千エキュで売れたのだという。

ルイズが今もっているのは、ギーシュの数年ぶりの新作であり、更には手も込んでいるであろうもの。しかも、数ある薔薇や時計や龍などではなく、鳥という一点もの。

どう考えても数万エキュはするだろう。ともなると、礼をしなくてはならない。更に言えば、先日姫に送られた、あのゴーレム。

ゴーレムが身につけていた、未知の金属で作られた剣と鎧。アレは恐らく、鉄で作られた武器よりも遥かに強力になるだろう。

もしかすれば、ルイズに贈り物をしたのは、娘に恋心を抱いたかも知れない。ならば、これを機会に内側に取り込めるかも知れない。そうとなれば、早速誘いの手紙を出さなくてはなるまい。ヴァリエール公爵はしたたかな男であった。

セイバーを作り、今度はバーサーカーを作る事にした。髪の毛とかも適当でいいから楽チンだね。

という訳で、一番苦勞する植毛やら体のバランスやらをそんなに気にしないでもいいので、案外簡単に作れたバーサーカー。

筋肉達磨というのがピッタリな感じで、肩に水銀燈を乗せても問題ないほどの大きさになった。何しろ二メートルあるしね。まあ、普通のゴーレムの三倍近い人工筋肉が必要だったのだが。

走る速度は人体構造上の問題と風圧の問題で五十キロ程度。しかし、風系統の魔法であるエアシールドを使うと、風圧が無視できるようになり速度があがる。

これで移動用と、採掘用のゴーレム完成つと。ウィンフィールドをちゃんと作り直さないといけないな。

そう思っていると、父上から呼び出しを受ける。呼び出されて聞かされた話によると、この間ルイズに上げた細工の件でヴァリエール公爵がお礼をしたいとのこと。

父上におぬしも男だなという意味不明な微笑ましげな顔で見られ、仕方ないのでヴァリエール領に行く事になった。面倒だなあ。

馬車で行くのが普通なんだが、さっさと行きたいので、バーサーカーの肩に乗っていく事にした。サラマンダーよりはやーい。

どうでもいいのだが、徹夜でゴーレムを作ったりしているので、背が全然伸びない。今年で10歳だが、未だに129センチとか不味いよ。平均より低くてヤバイよ。

それに、運動も全然してないのでかなりナヨナヨしてる。つまり所、今の俺は男の娘である。ハハッ、ワロス。面倒だから切ってない髪も長いし。

まあ、それはどうでもいいやね。走る道すがら、やっぱりチタンを集める。もう少しでバルキリースカートが作れるだけの量が集まるんだ。

「うひひひ」

ひたすらに爆走を続けるバーサーカー。肩を揺らさないように気をつけて走らせる。

しかし、魔法の同時使用が不可能ねえ。並列思考。まあ、速読が出来る訓練があるんだが、あれをやれば普通に出来た。

フライの制御をしながらゴーレムを作ったり、ゴーレムを動かしながら錬金したり。結構神経使うが、案外出来る。

もしも戦争に出たら、俺は案外強いのかも知れない。まあ、それはどうでもいいことだろう。そういえば、土産作らなあかな。

この間は鳳凰を上げたんだから、今度は何にしようか。いっそのこと、白虎、青龍、玄武と全部作ろう。そうと来たら、作ろう。さっさと作ろう。

というわけで、錬金をちょいちょいと。うむ。素晴らしい出来だ。今にも飛び掛ってきそう。サイズはこの間の鳳凰と同じ。

四聖獣について教えないといけないよな。水晶は素晴らしいなア。うん。今度はバーサーカーの斧剣を作ろう。黒曜石で作るぜ。

ちなみにだが、ヴァリエール家は馬車で一日くらいの距離である。馬車の三倍近い速度なので、昼頃には到着出来るだろう。ちゃんと鳩で今日に参りますって連絡したし。

「■■■■■■■■———ッ！」

「うっひょう」

これはオークの声帯を調べて作った人工声帯だ。とはいうものの、肺変わりのポンプの調整なんぞ出来ないので、意味の無い怒号を出すだけだ。

しかし、これだけでオークやらなんやらを追いつめるので便利である。バーサーカーの感じが出てるしねえ。

それに、これは兄上に貸し出すつもりだ。皮膚の色は鉛色だが、これは金属を織り込んだからだ。そう簡単には壊れない。

戦場では怒声は相手を畏怖させるし、二メートル半しかないが、普通のゴーレムよりも遥かに速い速度で動くのだ。十分に恐怖だ。

何しろ、トライアングルメイジである兄上のゴーレムを殴り壊した程の強さである。戦闘にも十分耐えうるほどの強さだろう。俺って天才だな。

やっぱり、こういうゴーレムは面白い。今度は何を作ろうか。ひとまずウィンフィールドを完成させないといけないが。その次はセイバー・オルタ。

その更に次は、ギミックを付加した吸血姫。指を曲げられないが、ナイフほどの長さの爪を持つとかいいじゃん。ロボットも作りたいよな。三十メートルのゴーレムが動かせるんだからいける。

そんな事を考えながらもチタンを集め続け、ようやくバルキリースカートの製作に移る。これもゴーレム操作の要領で動かすつもりだ。人によっては複数の腕を持つゴーレムを動かしたりするし。

刃はダイヤモンド。他の部分はチタンで作った結果。案外余った。セイバーオルタの分の剣を用意しておこうかな。という訳で鍊金。最近では剣も作れます。

この世界の剣の作り方は、鑄造なので、しっかりとした鍛鉄で作る

俺の剣は高品質だ。更にはダイヤモンドでコーティングしているので、丈夫で切れ味も素晴らしい。

あのセイバーは普通に一騎当千の働きが出来るほどの強さのはずだ。まあ、姫様の警護の為に作ったんだから、そんな必要はないんだが。バルキリスカートで蜘蛛のように水銀燈を動かしてみるが、案外難しい。しかし、これは面白いな。カッコイイし。

そんな事をやっているうちに、ヴァリエール家の近くにやってきていた。バーサーカーの手に乗り、城門の兵士に用件を伝える。

暫く待って、中に通してくれることに。バーサーカーが立っても余裕があるって結構凄いな。うちは頭が削れるのに。

出迎えてくれたヴァリエール公爵に、手土産の鳳凰を除いた四聖獣を渡す。

「ほお……これは素晴らしい出来の細工だ」

「先日、御息女に差し上げた鳳凰との組みになっております。白い虎が白虎。蒼い龍が青龍。亀と蛇が玄武といえます。

なんでも東方の聖為る獣だそうです」

何故かヴァリエール公爵の顔が引き攣る。しかし、何で俺は呼ばれたのだろうか？

談話室に通され、細工の出来がどーだの、ゴーレムがどーだのという話をされ、いい加減本題に入って欲しいと思い始めた頃に本題に入る。

「所で、先日アンリエッタ姫殿下に献上した件のゴーレムだが」

「ああ、セイバー・レオンハートの事ですか」

「うむ。あのゴーレムの身につけていた鎧と剣。あれは君が作った

ものかね？」

「ええ、そうですが？」

「では、あの剣は量産することは出来るか？そして、その場合、我が領に輸入することは出来るか？」

「率直に言うなら無理です」

「何故だ？」

「材料がないからです。あの剣に使った金属はチタンといいますが、未だに鉾脈が見つかっておりません。

グラモン領で見つかった鉾脈は、アルミニウムの原料であるボーキサイト鉾脈と水晶の原料である石英の鉾脈のみです。

もしもチタンの鉾脈が見つければ大々的に生産を始めるつもりですが、鉾脈が見つからなければどうしようもありません」

「なるほど……では、鉾脈が見つければ？」

「グラモン領では見つかっていませんが、もしも他家の領地で発見されれば、鉾石を無料で譲渡する代わりに、生産されたチタンを半分ほど明け渡すのも吝かではないでしょう」

まあ、何となく予想はついていたけどな。チタンは鉄よりも優れた強度を持ちながらも重量は半分。更には酸化しづらい。

武器にするにはかなり良質な物だ。鎧にすれば、疲れ難く、鉄の矢尻では突破できないほどの強度だ。軍の装備に使いたい素材だろうな。

しかし、ヴァリエール領にチタンがないといいんだけど。俺として

はチタンはそこその量があればいい。借金も殆ど完済出来たし。俺の趣味に使うだけの量がればいい。それ以上はいらん。どっちかというとな酸化アルミニウムの鉋脈が欲しい。最近は宝石細工に凝ってるんだ。

「ならば、我が領での探索を行ってはくれぬか？」

「まあ、私としても、チタンは必要な所です」

嘘だよ。本当は必要なら錬金で用意するし。単純に精神力を消費したくないから鉋脈を探しているのだ。量が確保出来るしな。

広範囲を錬金してチタンだけを取り出すのは案外大変なのだ。だが、原子変換をするよりは楽なので、よくやる。

「では、早速向かってでもよろしいでしょうか？」

「私もついていくとしよう」

「そうですか」

まあ、別に断る理由もないので、連れて行く事にした。馬じゃ足が遅いので、バーサーカーの肩に乗ってもらった。

出来るだけゆれないように、十傑集走りを見せてみたが、案外難しいな。十傑集のゴーレム作りたいなあ。能力が再現できないけど。

「素晴らしいゴーレムですな……これも君が？」

「ええ、私が作ったものです。資源採掘用に作ったのですが、戦闘もこなせます。トライアングルメイジのゴーレムを相手に勝利しました」

「なんと！それは素晴らしいな……」

トライアングルメイジのゴーレムといえば、最低でも二十メートルはあるしな。それを二メートルのゴーレムが圧倒……素晴らしいかな！

そんな事を考えながら、良くある六角柱の水晶を磨く。錬金で汚れを取ればいいのだが、あえて布で磨く。いい、いいね！

意味もなくバーサーカーの頭に水晶で作った針を植毛し、いがぐり頭にしていく。頭突きしたら相手が穴だらけになりかねない。

「ドカベンだドカベン」

意味もなくプロテクターを作って、バーサーカーに着けていく。黒曜石で作った剣もバットにしてしまう。

「だいあもんどをつんざいてー」

あれ、これ侍ジャイアンツじゃね？

「な、なにをしてるのだね？」

「暇つぶしですよ」

「そ、そうか……ところで、ゴーレムを操作しながら魔法が使えるのかね？」

「ああ、これですか？物事を同時に考える訓練をすると、必然的に使えるようになりますよ。」

ゴーレムを三体動かす時に、半分は自動でやるでしょう？最初は

二体でやって、両方とも完全に手動にしてやってみると、同時に魔法が使えるようになったんです」

速読での脳の動きと同じだ。ゴーレムを進撃させながら順次ゴーレムを追加していくなんて事も出来る。最強じゃね？

まあ、戦争をするとなると、俺一人で戦争に勝つくらい訳ない。まずは核シェルター並みに丈夫な退避壕を作り、反物質を一グラム程度錬金。

凡そ22キロトンのエネルギーが発生するわけだが、そのエネルギーはどれくらいの爆発を起こすかというのだ……えっと、トリステインを消し飛ばすくらいは出来るかな。

今の俺の精神力で、全力全開で錬金した場合、凡そ1500キロの反物質を作成できる。まあ、スピンとかを逆にするだけだからな。もっと出来るかもしれない。

1500キロの反物質が反応した場合、世界は終わる。地球が消え去る所じゃない。太陽系が消滅すると考えても差し支えない。

簡単に説明すると、長崎に落ちた原子爆弾が150万個同時に爆発すると考えてくれ。どうなるか分かったか？

「なるほど……軍でもためしてみるか」

ヴァリエールも軍人の家系だし、諸侯軍は精強らしいしな。試すべきだろう。

五時間ほど走り回り、山にディテクトマジックをかけて回ったが、チタンの鉱脈はなかった。というか、俺は既にスクウェアメイジなので、目で見ただけで構成材質が分かる。

他のスクウェアメイジは、大体何がどこにあるかってのがわかって、物体の振動と回転を感じ取る事が出来るらしい。

スクウェアメイジに、回転を全て逆にする錬金をさせたらどうなるか恐いな。まあ、回転って言うのも原子のスピンを感じ取れるわけ

ではないので大丈夫だと思うが。

残念だが、仕方ないという事で、カーボンナノチューブを使った鎧を作ってやった。黒金の鎧という事にしてある。精銳にだけ装備させるように、三十個だ。

壊すのはむろんの事ながら、加工なんぞ夢のまた夢だろう。もし壊れるとしたら、俺が壊すときだけだ。あるいはルイズの虚無爆破。

そんな事を考えながら、ニコニコ顔のモノクルのオッサンに案内されていく。何で自分から案内してるんだろうか。この公爵殿は。

頭が痛くなったが、談話室に通されたら、三人娘さんと出くわした。というか、公爵殿が引き合わせたのだろうね。

「ギーシュ・ド・グラモンと申します」

そして、フランソワーズなんちゃらかんたらと自己紹介を受ける。

というか、皆美人だな。

エレオノールさんはキツ目だが、美人だ。まあ、胸は非常に慎ましいが。しかし、スレンダー系の美人でいい。しかし、俺にM気質はない。

二女のカトレアさんはおっとり美人さん。巨乳だ。しかし、俺は巨乳は好きではない。どっちかというと貧乳派なので。

ルイズはまあ……活発で可愛い子です。将来嫁にするなら、こんな子がいいな。

「この水晶細工。とっても綺麗ね。大事にしてるわ」

「いえいえ。手慰みに作ったものですから。大したものじゃありませんよ」

「恐縮する必要はないぞ。それは私の目から見ても十分に素晴らし

いものだ。素晴らしい細工師にもなれるだろう」

「私としては、趣味から発展しただけのものなのですが……」

「ほう？ 趣味？」

「ええ。兎角、強いゴーレムを。その為に水晶を骨にしてゴーレムを作りました。その時に、人間と全く同じような骨を作るのに、錬金の精密操作を練習しました。」

その練習の為に水晶細工を作ったのです」

なるほど。とヴァリエール公爵は納得した。ならば、ここ数年水晶細工が出回っていないのは、納得するものが作れたから、練習はいらなくなったという事なのだろう。

「まあ、今となっては水晶細工も趣味になってしまったのですが……最近では、もっと大きい水晶細工を作る事も増えましたね」

「ほう？ では、一つ、私に水晶細工を見せてはくれぬかな？」

「構いませんよ」

開いている窓から、庭を錬金して石英を集める。そして、それを一つに構成し。色をつけ、錬金して変化させていく。

緑色に変化した水晶を纏め、倒すのに苦労してキレまくった相手を構成していく。

「出来ました」

完成したのは竜。風竜とも火竜とも違う、羽の大きい竜だった。ぶ

つちやけた話、リオレイアである。

「ほう……これはまた……」

「造形が細かいわね……錬金一つでここまで出来るなんて……」

「なに。大した事ではありません。一に練習、二に練習。努力は人を裏切りません。まあ、努力した方向が間違っていれば、報われる事ありませんが」

「いい言葉だ。その年にして、君は優秀なのだな」

「まあ、私は、戦うものではなく、生み出すものです。それ以外は全て一流に至れぬ二流です。ならば一流へと至れるものを磨き上げるのが自明の理でしょう」

親父殿も戦闘の鍛錬は俺にさせない。体ガ小さい原因はそこにもあると思うが。

ゴーレムのほかにも戦闘手段は考えているが、余り小難しく考える必要もあるまい。

「なるほどな……しかし、あのゴーレムは一体どのようなものなのだ？」

「構造の事ですか？説明が難しいですが、大丈夫でしょうか？」

「メモ、取らせてもらおうわよ」

「ええ、どうぞ。じゃあ、説明をしますね。まず、ゴーレムを作成する際に重要なのはバランスですね。歩けるように人型にするのが

多いのは、バランスが取りやすいからです。

そして、私の作ったゴーレムは、そのバランスを徹底的に人間と同じようにしました。骨格から筋肉のつき方。それらを一切合財人間と同じにするのです」

「材料は？土から作るにしても、あのゴーレムはどう見ても人間に見えるし」

「カーボンナノチューブ……と言っても分からないでしょうが、兎に角硬く、そして細い糸を使いました。

硬度は鋼の約二十倍。伸縮性も高く、剛性も非常に高いです。それらを束ね、人間の数十倍以上の臂力を発揮します」

「その、カーボンナノチューブっていうのは何から出来てるの？具体的な細さは？」

「カーボンというのは炭素。ダイヤモンドを構成する物質と同じものです。具体的な細さは……10億分の1メートルです。これを数万本以上束ねて作ったのを人工筋肉と命名しました」

「なるほど……その強度も頷けるわね。そんなもの、鍊金出来るの？」

「正直な話、私以外には難しいですね。私は感覚が生まれつき異常に鋭いのです。私以外となると……」

「そう……それで、具体的な利用方法は？」

「カーボンナノチューブ自体の利用方法は沢山あります。束ねてロ―プにすれば、城を持ち上げる事すら可能なほどの強度になります。

金属に混ぜて生成すれば、飛躍的に強度を高められる金属もありますし。しかし、最悪の使用方法は暗殺です」

「どう使うつもり？」

「このカーボンナノチューブは目に見えませんが、そして細くとも非常に強度が高い。人間の肌を切り裂くくらい簡単なのですよ。

念動を使ってもうまく操作すれば、遠い所から確実に相手を葬り去る事すらも出来てしまいます」

「ううむ……外部に流出する危険性はあるか？」

「そうですね……正直な話、カーボンナノチューブは目に見えませんが、ですので、最悪手に入れられても、念動をかけられないと思います。

徹底的に教え込まなければならぬかもしれませんが、現時点で使えるのは私だけでしょう。」

「なるほど……」

「次に話を移しますけど。大抵の土メイジは動かすときに、外部にゴーレム操作の魔法をかけます。ですが、私のゴーレムには内部の骨格に操作をかけます。

こうする事によって、人工筋肉の収縮が正しく起き、強大な臂力を発揮できます。また、無理な負担を体につけないため、長期稼働が可能です」

「持ち歩く場合は？行軍のときに常に持ち歩くわけにはいかないでしょう？」

「そうですね。私のバーサーカー・ヘラクリウスは巨大ですが、セイバー・レオンハート等なら、普通の人間と全く同サイズです。

ですので、操作して行軍させても問題はないでしょう。それに、見た目は人間と同じですが、大して重くありませんし。バーサーカーでも80リールくらいしかありませんよ」

「確かに軽いわね……あれが人間なら300リールは難しいのに。その、姫様に献上したほうは？」

「あちらは……50リールくらいですかね。あのサイズならば、トライアングル以上のメイジなら大した消耗にもなりません」

「作るのにはどれくらいかかる？」

「そうですねえ……私だけでやるなら一体一ヶ月。人体構造を把握してるアシスタントがいるなら、一週間で一体くらいは作れるでしょう」

「なるほど……実に素晴らしい発明だな……」

その後、なんやかんやと説明を求められ、話していいところは全部話してやった。エレオノールさんは同じ土メイジとして、随分興味深そうに聞いてた。

そしてだが……何故か烈風カリンと模擬戦をする事になってしまった。ねえ！なんで！なんでなの！？

第三話

俺はね、確かにゴーレムでの戦闘は出来るよ？軍人にならなくていいって言われてるから、肉体の鍛錬はしてないけど、自衛手段としてゴーレム戦闘は学んでるんだよ。

だからってね、俺はそこまで強くないの！公式チートな烈風カリンに勝てると思ってんの！？ねえ！なんとかしてくださいよ！

「頑張ってくれたまえ。ギーシュ殿」

「無理無理！死んじゃいますって！人間としての枠組みをどこかに間違って置いて来た人には勝てませんよ！」

「……頑張れ」

「ヴァリーエル公爵ううううう！！！」

錬兵場に無理やりつれてこられ、仕方なく名乗りをする。それと同時に押し寄せる烈風。

前に立ったバーサーカーが怒号を上げて防御する。実際の所、腹に命中した烈風で内部のポンプが押し出されただけなんだが。

「いけっ！水銀燈！ヴァルキリースカートの武装錬金の力を見せてみろ！」

当然ながら、返事なんかせずに、ヴァルキリースカートを操作して攻撃を開始する。そう簡単には壊されないと思うが……。

「バーサーカー！狂いなさい！」

「■■■■■■■■■■——ッ！！！！」

振り上げる斧剣が、地面を爆砕する。咄嗟に飛んで交わした烈風カリンは、飛来する飛礫に強かに体を打ちつけられる。

だが、即座に体勢を立て直す。冗談くせえー！今ので失神してくれればいいのに！

剣の振りなんぞ知らないので、バーサーカーにはただひたすらに進撃させる。しかし、振り下ろす一撃全てが必殺。

受ければ容易く人体など微塵となり、たとえ防ごうとも防御の上から強引に打ち貫く豪力。そして、執拗に攻めを行う水銀燈。

全長10メートルに及ぶヴァルキリースカートを使い、自由自在に攻める。たとえ懷に潜り込んでも、体の強度は人間とは比べ物にならない。

と思った矢先。暴風が吹き荒れる。スクウェアスperlであるカッタートルネードだ。水銀燈はヴァルキリースカートがなくなるとも足で立っているから回避出来たが、バーサーカーが飲み込まれる。

「■■■■■■■■■■——！！！！」

しかし、金属が織り込まれた肌は切り裂けず。人を容易く吹き上げる暴風域から飛び出す。構造上非常に体は軽い。だから、地面に体を突き刺した。

飛び出すと同時に、斧剣を振り下ろす。それを、ブレイドで受け流す。凄いな。接近戦とか明らかに勝てねえ。

生み出された偏在が、水銀燈に襲い掛かる。ヴァルキリースカートを乱回転させ、近づけないようにする。そして、後退し浮かび上がった瞬間に、水銀燈が地面が碎ける勢いで踏み込む。

外側から見ている以上、反射神経と動体視力をひたすらに鍛え続けられ、これくらいの芸当は出来るのだ。疲れるけど。

そして、膝蹴りが入り、それと同時に、頭部と腹に二本の刃が突き刺さる。そして、横方向と縦方向に引き裂かれ、脳漿と臓物をぶちまけ……る前に霧となって消えた。

背後からの一撃。蹴りだろう。見事に背中に決まり。普通なら動けない……しかし俺はそんなバカな真似はしない。

現在着ている戦闘服は衝撃吸収用の高粘度ジェルを内部に導入し、外部はダイヤモンドに銀で塗装した六角形の装甲板を大量に使用した鎧だ。

「戦闘服の武装鍊金、シルバージャケット！伊達や酔狂でこのような格好をしているとでも思ったか！」

「クッ……（まさか思ってたなんて言えない……）」

「戦闘用の無表情の中に隠されている凶星という表情！この鎧は絶対防御の力を持っている！（正直な話、表情なんて全然わかんね）」

「たえ絶対の防御力を持っていても、攻撃はどうでしょう（私の表情を読むとは……末恐ろしい子供ね）」

「フッ、攻撃方法など不要！フルドリライズ！」

アースハンドを改良した魔法。フルドリライズ。俺の体にドリルはないので、足元からドリルが突き出す技である。

それ、フルドリライズじゃねーよといわれても仕方ない魔法である。しかし、しっかりと全てが回転してるので中々の脅威。

正直な話、マルチタスクを使ってゴーレムを操作して戦い、自分も戦闘するとか無茶振りが過ぎるよ。

バーサーカーに二体。水銀燈に一体。俺に一体。既に一体倒したから、俺の前に居るのか、バーサーカーと戦っているのが本体だろう。

後ろに飛んで逃げた烈風。鍊金で全てのドリルを一つにまとめ、レビテーションをかけて手に持つ。そして、足の裏にエアハンマーをぶつけて一気に射出。

「ギガドリルブレイク！」

「んなっ！なんて無茶を！」

ウィンドブレイクで吹っ飛ばされかけたが、ドリルは流線型で、俺の体は小さい。その為、風に吹き飛ばされる事もない。

ドリルを念動で高速回転させているお陰だ。というか、気付かなかったが、同時に四つも魔法が使えてる。驚いたな。普段は三つが限界なのに。

結構な速度で突進したのだが、それも回避される。後ろ側からブレイドの魔法で切りかかれる。それを小さいエアハンマーに乗せた拳で殴り飛ばす。

子供と侮っていたのか、剣杖が弾き飛ばされ、持っていたナイフを首に突きつける。偏在はこれ以上作り出せないだろうから、救援の心配はなし

「さて、貴方が本体ですか？」

「違う」

「では、消えてもらいます」

鍊金でナイフを伸ばす。ナイフ・オーバーエッジである。ぶつちやけた話、本人以外分からないネタ。

それを首に突き刺す。これで終了。後はゴーレム操作に集中できる。しかし、既に半分も精神力を使ってしまったんだが。

「仕方ないな……よしっ、全力全開のネタ技で行くぜ」

タクトに似た杖を振り上げ、空中に大量の鉄の塊を生み出していく。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神」

詠唱に一切の意味はありません。単純に集中してトリップする為の呪文である。ほうら、何も見えなくなってきた、気持ちよくなってきた。

「今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

空中に待機している鉄の塊が1000を超える。確か、1064個だから、そこで止める事にする。

鉄の鍊金自体は大した事でもないし、1064個と言っても、トイレットペーパーの芯くらいの大きさなので、消耗はそれほど酷くない。

とはいうものの、残ってる精神力の大半を使用してるし、スクウェアアクリスの人間が一回使えるかどうかというほどの消耗だ。

「フォトンランサー・フアランクスシフト！打ち砕け！ファイア！」

降り注ぐ鉄塊。1064発の鉄の塊が若干四秒にして撃ちかかる、俺の最強の広範囲殲滅攻撃。実はたった今生み出した技である。

地面を打ち砕き、大量の鉄片が襲い掛かる。水銀燈とバーサーカーは当たらない場所に誘導済み。まあ、何発か当たるだろうけど、バーサーカーを貫くのは無理だ。

大量の鉄の塊が降り注ぎ終わった後、そこには肩で息をする烈風カリンが居た。どうやらだが、エアシールドによって何とか防いだよ

うだ。

まあ、飛来する鉄の塊だから、スクウェアクラスのシールドだと防がれるのは分かってるんだよね。しかし、あの量を防ぐのは流石に無茶だったようだ。

烈風は引っくり返った。多分だが、精神力が枯渇してしまったのだろうね。かくいう俺も限界が近い。身長が130もないし、筋肉も殆どないので、体力がないのだ。

「疲れました……」

座り込むと、疲れが押し寄せてきた。もう眠いんだ、バーサーカ……眠ってもいいよね？

「■■■■■■■■————ッ！！！」

バーサーカーの咆哮が響き渡り、その肩に水銀燈が腰掛ける。眠いけど、寝てるわけにもいけないので、バーサーカーをゴーステム操作で呼んで、肩に乗せてもらう。

「疲れました……」

「いやはや……まさか、カリィヌを倒すとはな……恐れ入った」

「まあ、勝てたのは単純に精神力の差です。特に最後のは飽和攻撃をしたからですから」

「いやいや、あれは土のスクウェアでも防ぎきれぬだろう。カリィヌだからこそ出来た芸当だ」

「そうですか……疲れました……眠ってもいいでしょうか？」

返事を聞かず、俺は眠りに落ちた。もう疲れたんだ。バサカラッシユ……

目が覚めた後、一頻り烈風に褒めちぎられた。まあ、既に引退したとは言え、あの名高い烈風を打ち倒したのだから。

まあ、褒めちぎられたというのは烈風にとってはだ。普通の人にとったら、結構辛辣な事も言われた。

あのゴーレムは確かに強力だが、戦い方を見極められれば、手玉に取られやすいとか。そういう改良点についても言われた。

結構有意義になった。それから家に帰り。体も鍛えなければいけないかと思って、体をディテクトマジックで調べた。筋肉の性質によつては鍛え方に違いが出るからな。

そこで判明したのだが、俺は遺伝子疾患にかかっている事が判明した。精神力の異常増大を行うために、肉体側の成長を減っていくようになっていた。

恐らく、最大まで成長しても身長は160センチ前後が限界。筋肉も殆どつかないし、体毛を伸ばす余裕があるなら、精神力の増大を行う。

そしてだが、俺の精神力は無尽蔵に増えていく。先日の戦闘によって、更に精神力が増大した。もう、チートもいい所だ。

最終的に分かった事で、俺の将来の骨格図や筋肉のつき方を調べ、現在のホルモン分泌量なども調べた結果、将来、男の娘になることが判明した。まあ、グラモンは全員優男の風貌だからな。

別に容姿なんか気にするほどのことでもないので、気にしない事にした。うん、風貌なんて関係ないさ！

現実逃避をしながら、錬金をしまくり、ウィンフィールドが完成。次はウォルター・C・ドルネーズを作ろう。カーボンナノチューブで戦うんだ……。

そんな事を考えながら、杖剣は面倒なので、カーボンナノチューブを杖にする事にした。杖は妙に上手く操れるので、カーボンナノチューブを杖にすればいい。厨二主人公最強伝説だ。

「よし、魔王を作ろう」

という訳で、デバイスの構造に頭を悩ませ、結局やめた。もっと別の方法でやりゃいいんだ。うん。

新魔法を作ろう。まずは錬金で杖型にまで小型化した加速器を作成する。これが途轍もなく難航した。三ヶ月もかかったからな。最終的にはガンダムのを妄想して作った。想像力だけで使える錬金最強。そして、原子核と中性子を内部で加速させる。ここに錬金の魔法を用いる。加速させる際に、内部構造の破損と、原子核と中性子の破損を防がないといけないから。

そして発射直前に内部でミックスさせて発射するのだ。加速器の作成に成功さえすれば、案外上手くいった。

一番の問題は電力だが、錬金の魔法で無尽蔵に電力が生み出せる。錬金が万能すぎる件について。何巻だったかで、コルベールが錬金でバッテリーの充電をしてるのを知らなきゃ出来なかったな。

早速試験発射をする事に。面倒なので、岩の塊で作ったゴレムに撃たせる。失敗したら恐いからな。当然、危険なので遠く離れた場所で行う。

電力についてだが、錬金は杖から出す魔法で行うものなので、カーボンナノチューブを錬金で作成して延ばせばいい。

「よしっ、発射！」

空に一条の光が放たれる。何発か発射し、部品の劣化などを調べる。固定化を何度かけても、安全面を考えれば、連続で五発程度の発射に留めるべきか。

それ以上はメンテナンスを行ってからではないと危険だ。これで上手くいったな。後は魔王様を作るだけだ。

9歳と19歳どちらを作るかで悩む。だったらどっちも作ってしまったという謎の指示が天から来たので、電波に任せて作った。

荷電粒子砲に使うための加速器をもう一度鍊金して作った所為で、精神力枯渇で倒れこむ。加速器二個に人形の材料二体分で使用した精神力の量はスクウェアメイジ四人分程である。

一週間後に再び作り始める。亜麻色の髪の毛がどうしても造れなかったので、仕方なく平民の方たちに頼んで買い取った。鍊金でキューティクルを補修してからだ。

しっかりとシャンプーとリンスで洗い、女性的な匂いがするようにもした。シャンプーとリンスが余ったので、家で使う事にした。母様に気に入られた。今までのシャンプーよりも遥かにいい具合で、リンスも素晴らしいそうな。

俺も使う事にした。薔薇の匂いやら香水の匂いは好きではないのだ。後は植毛を行い、レイジングハートのような形にした荷電粒子砲発射装置を手にしたせる。

レイジングハートとは言う物の、あれがガンダムのビームライフルと同じものだとは知るものはいまい。

今は五個まで同時に魔法が使えるようになったので、ゴーレム操作、鍊金、フライ、念動、いざというときの最後の一つを保険で残し、魔王様を飛ばせる事に成功した。

スターライトブレイカーの掛け声がどうしても欲しかったので、ボイスレコーダーを作った。集積回路の鍊金に苦労した。途中で声を保存するマジックアイテムを使えばいいことに気付いたが、些細な事だ。

ゴーレム操作で、首の筋肉を収縮させれば、ボイスレコーダーのス

イッチが入る。ボイスについては、フェイスチェンジを喉にだけかける、ボイスチェンジを使って作った。

俺の厨二病が止まらない。止まらなかったのも作ってしまった。漢の浪漫武装を解せぬ輩には分かるまい。当然ながら、ギガントハンマーは錬金して使います。

普通に俺専用のゴーレムだ。まあ、姫様に献上したセイバーは単純なゴーレムと同じような操作で使えるから問題はあるまい。

「はははは！我が軍は最強ではないか！」

虚無が出てこない限り、どんな軍隊にだって勝てる。実質、俺一人で運用しているので、まさにワンマンアーミー。

現在の兵力だが……水銀燈、バーサーカー、ウィンフィールド、ウォルター、高町なのは二名。水銀燈とバーサーカーは単純に動かすだけだ。

ウィンフィールドについては、金属を糸状にして織り上げた手袋を身につけさせて、適当なボクシング。執事服は強度最優先で作った質実剛健なもの。

ウォルターも似たようなものだ。こっちは老人Verで作った。最強の攻撃力を持つのが高町二名だが、肉弾戦闘を考えていないので、強度的には弱い。鋼の鎧よりも遥かに強靱な体だが。

バーサーカーは直接戦闘力に置いては最強だ。臂力に関しては、凡そ10トン程度のもので持ち上げられる。ソニックブームが発生しそうな速度で斧剣を振るし。

ウィンフィールドのパンチもとんでもない。家に穴が開いてしまったので必死に直した事もある。ウォルターは苦労した。精密操作する為に、手の骨格を滅茶苦茶に考えさせられた。

集団戦闘は得意ではないが、どんな相手でも確実に勝てる。糸って強いけど、決定打に欠けるよな。高町二名は、あれだけで軍を壊滅させられる。

問題といえば、ロマリアにばれたら攻撃されかねん。異端審問されれば、グラモンがお取り潰しにもなるのだ。そんなバカな事はしないがな。仮に攻撃してきたら、ロマリアを壊滅させてやる。

次は何を作ろうか。ロボットが浪漫だが、ガンダムじゃ駄目だ。リアル系もいい事にはいいのだが、ガンダムは好きじゃない。なんとなく見た目が気に食わない。

まあ、それは後にするとうしようか。ゴーレム操作だけでは武装のエネルギーにまわせない。エネルギーは錬金では変換すればいいので、大量の魔力を持った石があればいい。

という訳で、グラモン領の地底深くに眠っていた大量の風石を苦勞して採掘した。採掘の方法は、遙か地下深くまでディテクトマジックで探査し、念動で持ち上げる。

地下百メートル前後に眠っていてよかった。それ以上は念動で持ち上げられない。錬金で地面に穴を開け、念動で大量の風石発掘した。凡そ15トンの風石である。

これだけ大量にあれば億万長者も夢ではないのだが、そんな事をする必要もない。これは全て浪漫武装に使用する。マジックアイテムは魔力が籠った鉱石を燃料にしているのだ。

風石はそれに置いて最高の素材となる。何しろ、平民でもフライが使えるようになったりもするのだ。魔法の式を刻み、魔力を伝導させる。それで効果が発生する。

つまり、錬金の術式をレイジングハートに組み込めば、更に沢山の荷電粒子砲が使える。俺の負担も減る。最高じゃないか。更にはフライをゴーレム側で発動できる。操作だけでいいのだ。

レイジングハートの球っぽいのは飾りなので、それを風石に入れ替えた。フライに使うのには、体内に組み込んだ。どうせ胴体はがらんどうなのだ。

水銀燈等にも組み込んだので、普通に空を飛ぶゴーレムの完成である。最強すぎる。もうね、何処も俺達に勝てませんよ。

こんな感じで遊び続けているうちに、何時の間にか魔法学院入学の

時期である。身長は現在146センチくらいである。親父殿は貧弱な体つきは問題だと思ってい tara しいが、水の流れがおかしい所為で成長できないと説明しておいた。

ちなみに、年齢は15である。一応、ルイズと同一年なのだが、ルイズより小さい。ルイズも年齢にしては小さいほうではあるが。俺は年齢にしては小さすぎる方である。こっちの男はいつもこいつもデカイのだ。

魔法学院には馬車で向かう。面倒なのでバーサーカーで行っても良かったのだが、それは流石に不味いのでやめた。

バーサーカーは護衛。水銀燈は御者。ウィンフィールドとウォルターは従者。高町なのは二名も護衛という事にして連れて行く。人間は一人だけである。

「ギーシュ様、到着いたしました」

「ああ、そう。ありがとう」

「疲れてはおりませんか？」

「大丈夫だよ。余裕を持って出発したから、デスタがゆっくり進んでくれたからね」

「いえいえ、私のような平民にもお声を掛けてくださるギーシュ様の恩義に答えようとしただけでございます」

「そうか。ありがとう」

こんな感じの会話を御者にして、割り当てられた自分の部屋に荷物を運び込む。面倒だから魔法で運ぶ。魔法なんぞ使ってナンボだ。気に入っている水晶細工を並べ、水晶細工を眺めてうっとりする。

水晶は美しい。この透き通るような感じが美しい。

人形たちのメンテを軽く済ませ、次の人形を作るために錬金をする。今度はセイバー・オルタを作るんだ。甲冑は既に作ってあるから。ニヤニヤしながら錬金をし、休憩する為に水銀燈を使ってお茶を入れる。やっぱり、お茶を入れてもらうには女性が一番ですね！

「うん、お茶の味なんて全然分らないや」

実際の所、全然分らない。お茶なんて全部色付き水だろ。コーヒーは泥水な。大量に茶葉を使えば分かるんだが。

錬金で作ったカロリーメイトもどきをもそもそと食べ、再び作業開始。半分ほど人工筋肉を作り終え、後の半分は明日に回そう。

「さて、と、アレを整備するかな」

アレというのは、今回は首都トリスタニアを経由してきて、首都で止まったのだ。その為、首都で露天やらを見て回る余裕があった。

そこで、面白い物を見つけたのだ。何かといえば、場違いな工芸品。大抵は銃器だったりするのだが、今回は面白い物を見つけたのだ。

それは何かといえば、エレキギターである。軽く整備し、電気は錬金で調達。アンプも錬金で適当に作る。ギターは得意ではないのだが、こっちの世界でリユートっぽいのを習ったから大丈夫だろ。

何度か音を鳴らし、音を調整する。そして、大体の音が分かった所で、周囲にサイレントをかけてギターを掻き鳴らす。

「おおぅ……こりゃ面白い」

これって結構テクニック居るな。それに、握力も結構使う。重いからレビティションを掛けているのだが、鳴らすのも疲れる。

大分慣れてきた所で、前世で気に入って、よく聞いていた音楽を耳

コピで鳴らす。実は秘密にしていたが、俺には絶対音感があるんだ！
とはいふものの、この世界の貴族は結構絶対音感を持ってる。ガキンチョの頃からしょっちゅう音楽を聴かされてるのだから、当たり前とも言えるが。

「まあ、こんなもんかな……まずは、ボイスチェンジを掛けてだな……うん。あー、あー……こんなもんか」

声の確認をする。俺の容姿には似つかわしくない、男らしい渋い声になった。

そして、ギターを掻き鳴らす。まだま前奏ですよ。

「Come on baby do the rock and roll!」

ノリノリで、歌詞の意味なんぞ覚えていないが、大体の歌詞を歌い上げていく。やっぱり、エレキギタージャナイと駄目だ。リユートは気が抜ける。

熱唱し、最後まで詠いきり、ボイスチェンジを解除する。一応水のトライアングルスペルなのだが、結構簡単だ。錬金の応用みたいなもんだからな。

声帯の構造事態を変えてもいいのだが、それだと色々と面倒だ。自分の元の声帯に戻せない可能性もあるしな。

「トリストニアは魔窟じゃ。このようなすばらしいものがただ同然で買えるんじゃないからもう……」

なんと、たったの五エキュで買ったのだ。今後はもっとトリストニアを散策するでしょう。

エレキギターを置く為のスタンドを錬金で作り、そこにギターを置

く。うん、すばらしいね。
うんうんと頷き、今日はさっさと寝る。疲れたし、ちなみに入学式は明後日だ。

「おはようございました」

コンデンセーションで空気中の水を集め、顔を洗う。そして、さっさと着替える。やっとともに服が着れるぜ。

うちの母上殿は、俺に女の子の服を着せたがるからなあ。まあ、あれはあれで女性の服の構造を調べられるからいいんだが。

特注で作ってもらった制服を身に包み、邪魔臭いが貴族の証のマントを着込む。うーむ、どう見ても10歳前後だよな。俺。

まあ、そんな事を気にしても仕方ないし、朝なので食堂へと向かう。ここでまず最初に交流を深め、グループを作るのだ。

自分の指定された席に座り、押し寄せてくる眠気と戦う。眠いなあ。

「君がギーシュ・ド・グラモンかい？」

「うー……うん……？」

「僕はマリコルヌ・ド・グランプレ。よろしくね」

隣の席に座っていたぽっちゃり系の男子。よく食いそうな奴だ。

「ああ、よろしく……私はギーシュ・ド・グラモン……で、君の名前は？」

「だから、マリコルヌ・ド・グランプレって……」

「ああ、分かった……よろしく……私はギーシュ・ド・グラモン……」

「さっきも言わなかった？」

「ああ、うん……私はギーシュ・ド・グラモンだよ……」

「……起きてるか？」

「……死んでる」

「ダメだ！死ぬな！死ぬんじゃない！」

「あうあうあうあう……！」

肩をぐらんぐらんと揺さぶられ、ようやく目が覚めた。低血圧で困るな。いつもつれてきてる水銀燈も忘れてるし。慣れないベッド続きだったからなあ。

「ああ、ごめんごめん。で、なんだっけ？君は……マリコルヌ・ド・グランプレだっけ？」

「グランプレだって」

「ごめん。私はギーシュ・ド・グラモンだよ。よろしく」

「うん。よろしく。改めて、僕は風上のマリコルヌだよ。風のドッ

ト」

「私は人形遣いのギーシュ。土のスクウェアだよ」

「スクウェアか！そりゃ凄いや！」

「一に二に練習。ただただ練習。そして魔法に感謝を。朝起きて練習して朝飯食って牛乳飲んで練習して昼飯食って牛乳飲んで練習して夜飯食って牛乳飲んで練習して風呂入って寝る。

こんな風に生活してれば、簡単にスクウェアになれるよ」

「魔法の練習が過密すぎるよ！？」

「一日ほんの16時間程度じゃないか？」

「16時間！？8時間くらいだと思ったのに！？」

「六時に起床して、七時まで練習して、朝飯食べて、昼まで練習する。昼飯食べて、夜まで練習する。晩飯食べて、寝るまで練習する。完璧」

朝に1時間。昼までに5時間。夜までに8時間。寝るまでに2時間程度だ。うん、別におかしくないよね。

ちなみにだが、魔法の練習って言うのは必ずしも魔法を使うわけではない。早口言葉だって重要だし、魔法の構築をゆっくりやって、おかしい部分を治したりもする。

他にも、魔法の改良点を考える。青い炎、赤い炎では青い炎の方が高温だ。他にも、炎蛇のコルベールが使っていた、水蒸気を気化油にし、それに着火するという殺戮魔法もあったりする。

こういった風に、魔法は応用次第でどんな使い方だって出来る。ち

なみにだが、錬金を使えばどんな人間でも殺せる事を忘れてはいけない。錬金で肺の中の酸素を外に放り出せば即死だ。

錬金は応用性が高過ぎる。反物質を作れば世界だって滅ぼせる。荷電粒子砲は錬金があれば作れなかったし。人間だって結局は炭素の化合物の塊。錬金で体内の水分を取り出せば一気にミイラだ。

まあ、人体はその人物の精神力が通ってるから難しいけど。でも、大雑把なイメージの錬金じゃなくて、俺の持つ知識を使って、細胞核の破損や、アポトーシスを誘発するようにすれば、即座に体が壊死していく。

ホルモンバランスを崩せば精神の平衡が崩れていくし、眼球の水晶体を破壊すれば簡単に失明する。心臓の弁を破壊してやれば、病気になるだろうし。

俺ほど暗殺が上手いイメージは居まい。まあ、暗殺者になるつもりは毛頭ないが。

「凄まじい過密訓練……君がスクウェアイメージになれた理由がわかったよ……」

「まあ、錬金は私の趣味だからね」

ちなみにだが、俺は土のスクウェア、風のライン、水のトライアングル、火のトライアングルである。

風は別に必要ではないが、それなりのレベルのエアハンマーが使えないと、近接時の直戦能力がなくなってしまうからだ。

水はゴーレムの整備に使うから、必然的に上手くなって来た。火については、金属の精錬時に土だけでは限界があるので習得した。

俺自体の属性は土ではあるが、それは相対的な物だ。他の魔法に比べれば上手く使えて、比較的早く習熟出来たというだけ。

土のメイジだって、風だけ練習し続ければスクウェアスベルのカッタートルネードだって使えるようになる。とはどっかの本で読んだ

内容である。

という訳で、既に成長する事もなくなった土は放っておいて、最近
は風と火を勉強している。ちなみにだが、水と火でメドローアはで
きない。

「しかし、君は小さいね。訓練をしすぎると、背が伸びなくなると
聞いたけど、それが原因かい？」

「いや、私は体が弱い代わりに魔法の才能があるようでね……」

「そうか……」

このマリコルヌ。贅肉を落としたらかなりの美形になるのは間違
いない。女装させたらぽっちゃり系の可愛い女の子に見えるだろう。
マリコルヌの胃を、錬金で作り出した帯のようなもので締める。こ
うすることによって食欲が低下するのだ。その内痩せるだろう。

体内の錬金は難しいが、土のスクウェアの俺なら何の問題もない。
人体構造は水のトライアングルなので血流の流れで分かる。

果てしなく下らない事を考えていると、マリコルヌの顔が暗い事に
気付く。

「その、すまない。気にしていたんだろう？」

「なにが？」

「いや、何か考えてるみたいだったし……」

「ああ、いいんだ。それについては10の頃には分かった。折り
合いもついた」

「そうかい？」

「ああ、もう気にするような事じゃない」

こんな感じで会話を交わし、用意された朝食を食べる。俺は体も小さいので、食べる量も少ない。減らして欲しいもんだ。

マリコルヌは食欲がないなどといいながら、全て平らげていた。いつもなら君の分を貰うだろうに、などと言ってだ。ふざけとんのか、貴様。

まあ、どうでもいい事かと思いつながら、場違いな工芸品について頭をめぐらせる。あの中には銃もあるのだ。そういえば、ロマリアが銃器を使った部隊を作っていたような気がする。

だったら、俺も銃器を使おうと思う。鍊金の術式を組み込んだマジンを作って、魔力を流せば自動で弾丸を生成する銃とか作れそうじゃない？

まあ、銃を撃ったら引っくり返りそうだけどね。でも、俺には問題ない。なぜかといえば、俺は体を改造しているからだ。水の流れを上手く組み替え、清浄な流れにする。

そして、その流れを補強し、筋肉や骨格を補強するように、体内にカーボンナノチューブを通す。身体能力は王宮の騎士以上ですよ。

王宮の騎士は無意識に体に魔力を通して、かなりの身体能力があるのだ。俺は素の状態ですべてを凌駕しているというわけだ。最強だろう？

部屋に戻って、どうせやる事もないんだし、トリスタニアで武器を探そうと思い、バーサーカーを使って町へと全力全開で走る。

その後、片っ端からオートマチックの銃器を購入した。弾丸が残っているのが中々見つからなくて大変だったのだ。しかし、中々面白い物を見つけれられた。

というのも、地球からの武器ばかりではないのだ。パースエイダーとかあったからね。なかなか面白かった。

金属部品に妥協をする必要はないし、固定化を掛ければメンテナンスは殆どいらなくなる。完成したのが、俺の手にあわせて作ったエボニー&アイボリー。

大した時間は掛からなかった。元からあった武器を、俺専用に改造して、使いやすいようにしただけなのだから。錬金の術式には苦勞したが。

弾丸を生成しても、上手く組み込まれるか分からなかったが、それは自分の意思で上手く動かせる。しかし、連続錬金は疲れるので、家から持ち込んでいた風石を使った。

風石とか火石は、実は違いはあまりない。単純に属性の力なのだ。地中を流れる魔力の流れ。所謂地脈の力が凝縮されたものなので、どれでも関係ない。

ただ、爆発しづらく、取り扱いが簡単で発掘しやすいのが風石を選んだ。風石と火石の違いは、後で染まった属性の違いというわけだ。マガジンの下に長方形に削った風石を組み込み、装弾数が二発ほど減ったが、どうせ撃ち放題なので気にする必要はなくなった。

「んー……どれくらい撃てるか、だよなあ……ディテクトマジックで調べた限りだと、万単位でいけそうだけど……」

実際の所、俺以外だったら千発錬金出来るかどうかというレベルだ。火薬と弾丸をミリ単位の精度で錬金するのは難易度が高い。

そもそも、しっかりと炸裂する火薬を錬金出来るかも怪しいものだ。火薬自体は出来ても、火系統のメイジでも黒色火薬程度しか錬金できない。

つまるところ、弾丸を発射できるレベルの火薬が錬金出来るかどうかという話なわけだ。殆ど俺専用武器というわけだな。

固定化を掛けはしたが、整備はしっかりとしないといけないが、それは錬金で火薬の滓などを取り除けばいい。殆どノーメンテで使える最強の武器ですね。

「さっそく、試射をするかな……」

森の中に移動し、サイレントを掛ける。そして、ゴーレムなどを作り、そいつへと向かって放つ。

強化したフレームがスライドし、葉莢を廃棄する。そして葉室に弾丸が装填され、次弾が発射される。

体をカーボンナノチューブで強化してサイボーグみたいにしてなければ、確実に手の骨が骨折するか、肩が脱臼するレベルの威力だ。デザートイーグルを元に作っているため、桁違いのストッピングパワーでゴーレムを打ち砕く。人間に撃ったら即死だろう。今の豆鉄砲など目じゃない。

そのまま高速錬金に慣れる為に、連続でドカドカ打ち続ける。自分の肋骨を元に作った骨の指輪を杖代わりに契約しているので、銃を撃ちながらも錬金が出るのだ。

しかも、自分の体なので、精神力のとおりが滅茶苦茶いい。だからこんな高速錬金も出来るのだ。契約するの面倒だったけどね。

凡そ二千発ほどフルオートでぶっ放し、慣れば殆ど無意識で錬金が出る事がわかった。ただ、マルチタスクを使わないと頭がおかしくなりそうだ。

地面に散らばった大量の葉莢を見て、これを再利用すれば、更に錬金出来る弾丸の数が増えるんじゃないかと思った。原子生成なんてしてるから、風石の消耗が予想以上に激しい事に気付いたんだ。

大体、今使ってる三十グラムほどの風石で16000発が限界というくらいだろう。まあ、風石を入れ替えれば問題ないんだが。

でも、風石って三十グラム程度の量でも、1500エキューはするからな。数トン以上の風石の貯蔵がある俺じゃなきゃ、ここまでの浪費は無理だ。

その内、風のスクウェアになって偏在覚えよう。よし、じゃあ風系統の練習しよう。偏在なんてアレだお前、影分身みたいなもんだろ。

きつと、アレで錬金効率が一気に増加する。最強すぎるわwww。

「よし、じゃあ、早速風の練習だ！毎日死に掛けるまで風系統を使えばいけるだろ！」

エアハンマーや、ウィンドブレイク、エアカッターなどを片っ端から使いまくり、兎に角風の練習。只管風の練習である。

そんな感じで、精神力が枯渇するまで練習を続けた。ちなみにだが、精神力は限界まで使うと気絶する。だが、気絶する前なら、寝れば一日で全回復する。

一回でも気絶すると、何故か一週間くらい経たないと回復しないのだが、不思議な物である。ただし、精神力の成長効率が桁違いとなる。

別に精神力を増やす必要はないので、スクウェアになればいい。スクウェアというのは足せる数のことだ。つまり、風が四つ足せればいい。

詳しい事は分からないのだが、ドットスペルが10回しか使えない奴が居たでしょう。だが、そいつがラインに成長すると、何故か半分の効率で使えるようになるのだ。精神力が増えたわけではない。スクウェアになれば、ドットスペルが四分の一の効率で使えるようになるというわけだ。どういう事かは分からないが。

まあ、俺は既に土のスクウェアとはなっているので、風の術式構築が上手くなれば、すぐにでも風のスクウェアになれるだろう。何故こっちの奴等は自分の得意な系統ばかり伸ばすのか不思議でならない。

その後、疲れ切った俺は、さっさと部屋に戻って寝た。どうせやる事もないわけだ。というか、学校に来たはいいが、やる事は大きい。

あえて言うなら結婚相手を探せというわけだが、自分の意思で探せるかも分からんなあ。ちなみにだが、モンモランシーなんて興味

ないね。今度は合体剣を作ろうかな。

そんな事を考えているうちに、眠ってしまった。そして、夜に起きてまた特訓である。過密スケジュールすぎるW W W W。

第四話

「ワシがトリステイン魔法学院校長オスマンである！」

「漢塾かよ……」

「オトコジユクってなんだい？」

「いや、なんでもない」

俺の言葉に反応したのは、ヴィリエとかいう奴。確か、風のラインだったかな……土メイジの俺に自分の得意な属性で負けてるってwwww。

ちなみに、銃についてだが、革のベルトを二つ用意し、それを交差させるようにしている。そして、尻の辺りにホルスターをつけてある。

ここが一番取り出しやすいし、一番カッコイイからだ。今度はリボルバータイプをつくろう。あっちは弾奏を風石で作ってもいいかもしれない。

「えー、貴族として」

なんだかオスマンが言ってるけど、面倒なので省略。殆ど省略。という訳で、入学式は終わったよ。

という訳で、森に移動してフライで全速飛行を行う。フライって結構疲れるから。風系統の感覚を掴むには丁度いいんだよ。

「これ、急制動急加速出来たら超究極武神破斬できんじゃないね？」

いや、やらないけどね？もしくは裏蓮華でもよし。流石に目に見えない速度で走るのは無理だが、100メートルを10秒で走るくらい訳ない。

というか、目の前にエアシールドで気流を作れば、俺の顔や体に当たらなかつた風が、背中に向かって吹くわけだ。

そうすると、かなり強力な追い風が吹いて、更に早く走れるというわけだ。自転車もこれを利用すれば、80キロくらいで走れるらしいぞ。

「お、おお？これ、来た！来たコレ！」

唐突に自分が変化したのを感じる。こ、これは！風がトライアングルになったのだ！偏在はまだ使えないが、ライトニングクラウドが使えるようになった。

「ライデインとかもう、勇者じゃん！来た！これで勝つる！」

ちなみにだが、俺みたいに現代知識があると、魔法は強力になっていく。想像力によって威力が変わるので、ドット頃の俺でも、プラズマ化したファイアボールを使えたりした。

ラインスペルのフレイムボールなんて目じゃない温度である。フレイムボールも同じようにプラズマ化できるが。ちなみに、ファイアウォールをプラズマにするのは無理だったが、白く見える炎を発生させることが出来た。普通に人間とか蒸発するわ。

風だって、エアカッターは鋭くなんていわれるが、そんなのはナイフくらいしか思いつかないだろう。だが、俺は酸素原子が一つだけ、直進する事を考えているので、切れないものはない。

摩擦係数なんてほぼ無いので、理論上切れないものはない。つまりところ、カマイタチの単分子カッターである。最強すぎるだろう？

「ウィンディアイシクル！」

水の一と風二つのトライアングルスペル。ジャベリンとストームの合成みたいなものである。

風のラインと水のドットが使えて、主要系統でトライアングルなら使える魔法である。確か、タバサは水のトライアングルだったから、風のラインでもあるわけだ。

「フハハハハ！ここまで風系統が進化したならば、後もう少しだ！」

増大した精神力を盛大に使い切る。既に俺はスクウェアメイジ十人分の精神力があるのだ。というか、俺に成長限界はない。

風がスクウェアになったら、次は火と水もスクウェアにしよう。それで、エレメンタルラース作るんだ……。

ギーシュはやっぱり、一つの事に熱中するとほかの事が目に入らなくなるようだ。

「風、風は最強である！空を翔る風は最強である！風ったら最強ね！」

勉強の時間である。つまるところ、学校の授業である。

「先生！話を進めてください！」

「黙れ！風は最強だ！」

最早わけが分からなかった。現在授業をしているのは、風のスクウェアメイジである疾風のギトーである。

最初にラインがどうだの、スクウェアが一人しか居ないだのと文句を垂れたあと、風最強伝説を語り始めたのである。

「先生！」

「なんだね、ギーシュ君。私は今、風が最強であるゆえんを話しているのだよ？」

「私はあと少しで風のスクウェアになれそうなので、自主的な訓練をしていてもいいですか！？」

「よからう！君は土のスクウェアメイジだったはずだが、風のトライアングルでもあるのか！非常に優秀だな！風が最強である事を証明してくれたまえ！」

そして、ギーシュは教室から出て行った。他の生徒は全員、アイツ上手いことやりがったなと思って居たが、別にうそでもなんでもなく、本当にあと少しで風のスクウェアになれそうだというだけだ。実際の所、精神力の問題さえ解決すれば、スクウェアになるのは難しくは無いのだ。ただ、自分の得意な属性でないと、上手くイメージが固まらないのだ。

だからこそ、他の属性は昇格しにくい。だが、妄想力が多大で、物理学やらの知識があり、ゲームやらの技を真似れるギーシュにとっては難しくは無い。

後の問題は構築力。風は形が無いため、しっかりと術式を構築しな

いと難しいのだ。ラインだったものが二日でスクウェアになれそうというのは、とんでもないが。

「よっしゃ、いける！あと少しだ！もう少し！ホラホラ、もう少しだ！限・界・突・破ああああああ！！！！」

ギーシュは、風のスクウェアになった！まるで、そんなコマンドが出てきそうな気分だった。

実際。既にスクウェアになっていた。成長率が早すぎると思わないでもないが、これが彼がチートたる由縁である。

「いける！いけるぞお！ユビキタス・デル・ウィンデェ！」

そして、十体のギーシュが生成された。

「やった！」

「これで！」

「勝つる！」

「風は！」

「最強！」

男の娘乱舞。そんな言葉が一瞬脳裏を駆け巡ったが、それを打ち払う。偏在に偏在を使わせることは出来ないが、偏在の経験は本体に帰る。

まあ、影分身みたいな事が出来るというわけだ。風のスクウェアメイジで五体くらいなら偏在を出せるらしいのだが、スクウェアメイ

几十人以上の精神力を持つギーシュだ。

合計で四十体ほど偏在を生み出し、火と水の系統を練習させる。各自二十倍の速度で習得が進むのだ。全属性スクウェアも夢ではない。

「はははは！我が軍は圧倒的ではないか！」

げらげら笑う。そりゃそうだ。五十人のスクウェアメイジで、近代兵器で武装しているのだから。

ついでに言うと、偏在は持っているものも複製されるので、銃器もしっかりある。全員で掃射をすれば、あっという間に葉茨の山が出来る。

わがままを言うなら自動小銃が欲しい所だが、生憎と俺に整備生産出来るのは、ハンドガンだけだ。自動小銃は構造が複雑すぎてやる気にもならん。

いや、まて。AK47はロクに整備をしないでも使用できたという。ならば、構造を調べて生産出来ればいいのではないか？幸いにして、俺の鍊金の精度は異常なまでに高い。

工業製品を作るほどの精度ではないが、ミリ単位での調整は可能だ。ならば、AK47程度の銃なら生産が可能ではないか？いや、やってみせる。そういうべきだろうか。

俺はやるぞ、一人軍隊を作り上げて見せるぞ。グラモンの家柄が、伊達では無い事を見せてやろうではないか。一人軍隊とはこの事を言うのだ。分かったか！

烈風カリンなど、目ではないぞ！俺こそが最強である！風が最強たる由縁！ギトーではないが、それは分かった！見せてやろう！

「よっしゃ！次の虚無の曜日はトリスタニアに言って、AKの発掘だ！いや、むしろ今すぐ行こう！というか、いけ！」

というわけで、二人の偏在を町へと送り出す。ちなみにだが、偏在

の感覚は非常に気持ち悪い。

自己判断で動いているというのではない。かといって、俺の命令で動いているというわけでもない。全員が同列なのだ。

俺がP2Pのホスト（一番最初のこと）だとする。そして、生み出された偏在は、データの放流によって形成された、俺と一切の同一存在。

全てが同列であり、俺が複数居るという事。全であり一、一であり全。強いて言うならば、この状態は群体とでも言うべき状態だ。

とはいう物の、偏在は偏在でしかない。既に独立しているとは言えど、制御しているのは俺なのだ。本体である俺が死ねば、全員が消える。

一応、本体の俺には権限のようなものはある。自分がオリジナルであるとはわかってるし、偏在に対する命令権もある。ただ、偏在は一個の人格がある俺というわけだ。

一体どういう理屈で発動しているかはちっとも分からないが、使えるんならそれでいいじゃないか。

「全属性スクウェアになったら、次はネタに走るかな……精神力が莫大に増えるし、俺が50人居るみたいなんだしな……」

その日は、一日中練習で終わった。町に行かせた偏在はAKは見つけられなかったようだ。次はガリアとかにも向かわせよう。ゲルマニアは研究結構してるから、買えそうにないしな。

今日一日で火はスクウェアになれたが、水はまだトライアングルの上位といった所だ。明日にはなれるだろう。

授業は適当に聞き流す、偏在を使って練習しまくる。上昇する精神力。だんだん人間をやめて行く俺。

全ての属性を完璧に極め、もうこれ以上は魔法上手くならねえよ。そう思ったあたりで、周囲にゴミみたいなものが浮かんでるのが見え始めた。

『てつ、うみだす、にんげん』

『どぶ、つめたい、どこにでも』

どうやら、このゴミみたいで、光ってるのは、精霊らしい。色で区別するようだ。そしてだが、俺、精霊にめっちゃ好かれてる。

支離滅裂かつ、意味不明な言葉の端からすると、全ての属性を極めた俺だからこそ、精霊が見えるらしい。

そしてだが、精霊が見える人間は滅多に居ないとの事。また、エルフはあくまでも感じるだけで、見えているわけではないらしい。

そして、見えて聞こえる俺は、とっても珍しい上に、自分たちと会話が出来から、自然と寄って来るらしい。精霊は全であり一なので、区別というものはないらしい。

なので、全ての精霊が知識を共有しているので、俺は精霊に好かれているとの事だ。で、精霊が見えるので、精霊にお願いすると、精霊魔法が使えるようになる。

まあ、簡単に言ってしまうと、先住魔法だな。まあ、滅多に使わないが。だって、異端指定されちゃうじゃないか。

で、最近気付いたのだが、水の精霊の所為で、俺の寿命が滅茶苦茶伸びてる。具体的に言うとか、千年は生きそう。オスマンとか見ると、水の精霊がうじゃうじゃいる。

どうやらだが、オスマンは水の精霊のお陰で何百年も生きているようだ。俺もあんなふうになるのか。嫌だな……錬金でテロメアとか追加できないかな。

そうそう、オスマンの周りには水の精霊がいるが、見えているわけではなさそうだ。感じてはいるようだがな。

いい加減、俺のチート具合が酷くなってきた。偏在が同時に百体は楽勝で生み出せるようになった。山を全て鉄の塊に出来るくらい精神力が増えた。反物質にしたら太陽系が滅びかねん。

スクウェアメイジ何十人分か分らないくらいの精神力になって、既に俺は人間なのかどうかも怪しくなり始めた。

偏在で訓練した分だけ精神力が増えるのだ、単純に五十倍の速度だ。一日が1200時間になるのと同じなんだぞ？俺の場合、精神力が無尽蔵に増えるから大変だ。

既にスクウェアメイジ数十人分じゃなくて、数百人分になってるかもしれない。もう嫌になってきた。アサルトライフルの入手に成功した。AK74だったが、問題はないだろ。

整備するのは結構楽だったが、増産するのは大変そうだ。俺じゃないと生産できん。だが、偏在が使えるので楽勝で増やせる。そもそも、俺一人居れば偏在で増やせるのだから、俺が戦う分には必要ないか。偏在が消したら、偏在が持つてるものも消えるしな。

精霊たちを使って熱心に訓練をしていたら、だんだんと俺の息子の元気がなくなってきて、胸が痛くなったり、膨らんだりしてきた。性別の概念がなくなってきた！？

どうやらだが、精霊という存在と触れ合いすぎたようだ。精霊と近い存在になったが、所詮は人間。精霊にはなれない。結果として、精霊と似たような存在になったというわけだ。

あともう少し気付くのが遅かったら、女性器が形成されてしまう所だった。というか、水の魔法で見た所、既に卵巣らしきものは形成されている。活動はしていないが。

今の俺は、男7女3くらいの割合のようだ。だんだんと進行しているが、偏在を使って触れ合って居たのをやめた所、進行は遅くなった。後三十年もしたら女性としての機能が完璧に動き始めるだろう。

まあ、男としての機能はなくなりそうにないし、どちらかというと男性側の存在だ。まあ、簡単に言うと、自分が子供を生む事も出来

るし、相手に子供を生ませる事も出来るというわけだ。

なるつもりはないぞ？まあ、いつかはなってしまうわけだが……ちなみにだが、エルフは感受性は高いが、順応性は低い。つまるところ、精霊は感じられるが、そういった存在になる事は無いという事のようなのだ。

俺達人間は感受性は低いが順応性は高い。詰まる所、精霊を感じてしまったら、後はもう終わり。両性具有になるしか道は無いようだ。あと、三十年もしたら、完璧に両性具有になるだろうな。

既に胸も膨らんでしまってるわけだし。ちなみにだが、Bカップだ。身長が145くらいで止まってるので、十分に大きいサイズではないかと思う。あと、自分のベッドの匂いが甘い。

「……なんだか、思考まで女性っぽくなって来てるなあ……」

胸のサイズが小さくはないと考えてどうするんだ。全く……まあ、仕方ないのか。

ついでに言うのだが、最近はやる事も無く、ゴーレムを作るばかりだ。セイバーオルタも作ったし、姫殿下に献上したセイバーも新しく作った。ダブルセイバーである。

そしてだが、偏在は完璧に生命活動が停止してから霧散する事がわかった。そして、それ以外は人間と一切変わらないことも。

なので、それを利用して、偏在の自分を改造してみた。骨格やらなんやらから、完璧に取り替えて、人間とは言えない物に改造した。

「上手くいったな……」

「目線が高い。というか、この改造に意味なんてあるのか？」

「ばっかおめー、俺達が考える事なんて一つだろ？となると、相手も作らないといけないわけだ」

「なら、相棒も作るのか！ よっしゃ、キタコレ！ これで勝つる！」

改造された俺は、分の悪い賭けが好きなパイロットになっている。
ああ、次はエクセレン・ブロウニングだ。

そして、その後はアルトアイゼンとヴァイスリッターもだ。正直な話、テストドライブが無かったらロクに動きそうに無い。しかし、この世界には風石というチートなアイテムがあるのだ。

アレさえあれば、物理的に直立しないし、部品が加重に耐えられないという事も無くなる。ただし、かなりの量を消費するだろう。だが、数トン以上の風石を発掘した俺にとっては問題ない。

じゃ、まずは金属の調達だな。後、組み立てる場所も必要だ。まあ、そこらの原っぱに建造場所を作ればいいか。あるいは地下。どうやって搬出するかが問題になるが。

「アルトアイゼンがいいと思う奴」

128人の手が上がる。

「アルトアイゼン・リーゼがいい奴」

49人の手が上がる。何十人か手を上げてない奴も居るが、どっちでも言いという事だろう。

「じゃ、アルトアイゼンだな。ヴァイスリッターとライン・ヴァイスリッターだったら……ヴァイスリッターな」

まあ、いいか。じゃ、頑張るとしようかな。一体なんの金属を使えばいいのか、サッパリ分からないが、そんなものはどうとでもなるだろう。

というか、駆動部だの弾薬供給機構だの、どうやったらいいのかさっぱりだが、時間はタツプリあるんだ。好き放題やるとしよう。

「なんで俺はここにいるんだろう」

「私が呼んだからでしょ」

今、俺はルイズの部屋にいる。まあ、それなりに親しくお付き合いさせてもらってるわけだ。男女の間柄ではないぞ。

「何で俺は呼ばれたんだ？」

「それなんだけど……私に魔法を教えて！」

「なんでやねんなー」

「あ、あのね？あともう少して二年生に進級でしょ？それで、使い魔が召喚出来なかったら、退学じゃない」

「ああ、なるほど……」

とはいう物の、お前が虚無だなんて言っても信じないだろうしなあ。

「ていうか、今からか？あと一ヶ月も無いじゃないか」

「休みも入れたら二ヶ月半はあるわよ」

「俺に休みを削れと申したか」

現在、凡そ五百人の俺が工場でアルトアイゼンとヴァイスリッターの製造をしている。弾薬供給機構は、マガジンベルトを使う事にした。140ミリの弾丸を作るのが大変過ぎたが。

リボルビングステーク自体は簡単だった。弾丸の激発でバンカーを射出するだけなので、射出した後バンカーが所定の位置に戻ると、弾奏が回る機構さえ作ればいい。

ヒートホーンは流石に無理だった。火石を使えば出来そうだったが、そんな危ないものを使うわけにはいかなかったし。

スプリットミサイルに関しては、推進剤の発火と噴出が大変だったが、一度作れさえすれば、後は錬金で製造可能なので、問題はない。試作が完成するまで四ヶ月掛かったが。

常にペースは上がっているのに、恐らくは使い魔の召喚儀式の辺りでアルトアイゼンは試作機が完成する。まあ、試作機をそのまま使うつもりだが、俺はなんでこんな作ったんだろう？

ヴァイスリッターに関しては飛行の術式を何処に刻むかが計算が大変すぎて、作業が難航してる。アルトアイゼンはずんぐりした体型なので、前方にエアシールドを張ればいいのだが、ヴァイスリッターはそうもいかない。

羽やらがあるし、高速飛行をしなきゃいけない。極端に装甲を削らなきゃいけないし、そうなると部品強度が問題になるし、飛行出来るか分からんし、着地したらつぶれそうだし。

固定化を掛けてもそれなので、装甲やフレームの材質から考え直すべきだろうか？チタニウム合金を使っているのだが。カーボンナノチューブを使った金属を使うべきだろうか？

ヴァリエール公爵に送ったのは、適当に作ったものなので、しっかりと考えて試作を繰り返し返せばなんとかなりそうだし。うん、偏在側にもこの考えは伝わってるだろう。

「ねえ、お願いよ！エレオノール姉様になんていわれるか！」

「でも、ルイズは軍人なら何とかかなりそうだけどね」

「なんで？」

「だって、ルイズは全力全開で爆発させると、三十メートルは吹っ飛ばせるじゃないか。トライアングルスperl並みの爆発を、コモンズperl並みの速度で連射出来るんだから」

「私は魔法が使いたいのに！爆発で戦っても仕方ないでしょうが！」

「分かった分かった。じゃあ、まずだけど。まず、メイジは最初に自分の属性を把握するだろ？」

「そうね。最初は発火とか凝縮とかをやらされたわね」

「その後にコモンマジックを使うわけだけど、まずは自分の属性を自覚する事が必要なわけだ」

「そうなの？」

「そうなんだよ。で、だ。まずは、四系統のどれかの系統が自分の属性だと思って、コモンマジックを唱えなさい。サイレントは掛けたから」

で、四回の爆発。当然ながら、全て失敗したわけだ。ついでに言う
と、薄いピンクだったぞ。

「駄目……やっぱり魔法が使えない」

「次は虚無だ。自分が虚無だと思って魔法を使え」

「ハッ、駄目で元々って奴ね……」

ルイズが念力の呪文を唱えると、俺が新たに生み出した石の塊が浮かび上がる。

「……使えたな」

「そうね……使えたわね……」

「じゃあ、なんだ、アレか……ルイズは虚無か」

「んなわけ……ないのかしら……?」

「じゃあ、虚無だと仮定するのでしょうか。さて、虚無系統だとすると、虚無の魔法が使えるわけだ」

「そ、そうね！魔法が使えるようになるのよね！」

「まあ、呪文が分からないから不可能なわけだが」

「そんなあゝゝゝ!!!!」

「すまんが、これ以上は手に負えんぞ。王宮の禁書書庫に忍び込むわけにもいかないしな」

という訳で、ルイズの属性が虚無かも知れないという事がわかった。まあ、俺には原作知識があるわけだが。

里帰りである。ノロイ馬車で帰らなくちゃいけないのが面倒だが、アルトアイゼンは未完成なので無理である。

馬車にレビテーションをかけたら馬が楽になったのか、随分と時間が短縮出来たのでよしとする。

家に帰ってきて見ると、母上と二番目の兄上が居るらしい。母上に帰還の挨拶をした後に、部屋へと引き込まれてしまう。ああ、またか……。

「ああ、何でギーシュは女の子に生まれ来なかったのでしょうか」

「知りませんよ母上……」

強制的に着せられたドレス。流石に膨らんだ胸を見せるわけにはいかなかったので、率先して着替える事になった。ああ、死にたい。しかも鏡で見せられた自分が凄く可愛くて、思わず声を掛けたくないほどの美少女に見えた事で、余計に死にたくなった。

その後、何着か着せ替えられて、何故か俺の服をメイドに預けてしまったと言うので、この格好で過ごす事になった。だから嫌だったんだ、里帰りは。

「ああ……激しく鬱だ……」

こんな時はゴーレムを弄るに限る。兄上に譲り渡したプロトタイプのゴーレムが家に持ち帰られているので、その整備を行う。

一応、兄上にも整備の方法はみっちりと教えたのだが、やはり俺みたいに一万分の一ミリレベルでの鍊金は不可能なのだ。完全な力を発揮するには、そう言ったレベルでの工作が必要になる。

要するにだ、日本でも飛行機はあるが、あれはスペックデータ通りの性能を発揮する事は滅多にありえない。一箇所にはんの一ミリのズレでもあれば、性能は大きく低下する。

全体の部品を完璧にスペックどおりに作成するなど夢物語に等しい。しかし、魔法はそれを可能にしてしまう。やはり完全ではないのだが、固定化と硬化の魔法を使えば、性能の低下も抑えられる。

世界が減びても消えそうに無いレベルの固定化はかけてあるが、やはり整備は必要になるのだ。骨格の磨耗具合を調べ、筋肉の断裂部位を調べる。

体表が削れて、それを補修した形跡があるが、上手く補修してある。兄上にはしっかりと教え込んだから、コレくらい出来てもらわなくては困る。

ひとまず、人工筋肉を修復し、骨格部分の磨耗を直す。ついでに体の各所に追加装甲を織り込んでおく。これでよしっ。

「おやおや、君はどちら様かな、小さなレディ」

「ひゃう!？」

け、気配がなかった!？振り向いてみると、二番目の兄上であるアレクサンドル兄だった。

「このゴーレムはね、僕の弟のギーシュがだね」

「いや、俺がギーシュですけど」

「ハッハッハ、ミ・レイディ。面白い冗談だね。君のように可愛らしい女性が僕の弟のはずが無いさ」

「ああ、駄目だこの兄貴。間違えて弟に声をかけてしまった過ちを

認めたくないらしい」

「そうだよ！何か悪いか！？大体にして、何でドレスなんか着てるんだ！ギーシュ！」

「母上が……」

「……すまん」

「いえ……」

どいつもこいつも、幼い頃は母上の洗礼（女装）を受けているので、理解してくれるのだ。しかも、俺は何時まで経っても成長出来ないで、ずっとこのままである。

皆、末っ子だからと言うのもあるが、俺に優しくしてくれる。ああ、女装させられて大変だな、ギーシュ……という事である。

「……………はあはあ……」

「兄上、何故息が荒いのですか？」

「い、いや、ギーシュから甘い匂いが……」

そりゃ胸が膨らんだ所為で、自室で風呂に入ってる俺に対する嫌がらせか？まあ、前世で使ってたシャンプーとリンスをイメージで鍊金してるから、いい匂いがするのは分かるが（女性用のシャンプーだと忘れている）

こっちの世界にはシャンプーとリンスは秘薬しかないからな。貧乏人には使えないし、金持ちでも矢鱈滅多ら使えるわけではないのだ。俺は体臭が気になるタイプの人間なので、毎日しっかりと体を洗っ

ているのだ。

「な、なあ、ギーシュ、僕の部屋で話さないかい？」

「何だか貞操の危機を感じるので止めておきます」

「ハッハッハッハ、そんなに怯えないで。大分前に貰った、東方の剣があるだろう？あれについて聞きたいんだ」

「……分かりました」

東方の剣とは言うが、日本刀である。しかし、桜観剣を元に作ったので、東方P r oの剣でもある。

既に春休み中に女性性器が形成されてしまっているのも、もしも兄上が暴走して俺の服を剥いたりでもしたら……いや、強い肉体があるから大丈夫か。

……大丈夫だと、いいな……。

第五話

「……変態」

「すみません」

「人間の屑」

「仰るとおりです」

「亜人にも劣る」

「真に申し訳御座いません」

「妊娠したらどうしてくれんの？」

「責任を……」

「弟と結婚なんて出来ると思ってたんの？」

痛い。股が痛い。兄上に薬を盛られ、杖も指輪も没収された上に犯された。痛いけど気持ちよかったのが余計に腹立つ。

水の精霊が俺の危機を解決する為に痛みを和らげて、快感を増幅させた所為だとわかっていても腹が立つ。

元が男だけに貞操を奪われた事は大して気にしないが、女性人格とどうか女性的な部分も増えているので、そこで悲しみと怒りがある。信じていたのに裏切られたと。

盛られた薬は睡眠薬と媚薬。媚薬って盛られると辛いんだね。意識が朦朧としてた所為で、精霊たちに命令して薬の効果を和らげるこ

とも出来なかったし。

「だって、だって、ギーシュがそんなに可愛いのがいけないんだ」

「そもそも葉を盛らなければいいのに」

シートで体を隠して、床に散らばっている衣服の残骸を見やる。真先に胸元の布地を破かれたからな。固定化突破する兄上の腕力パネエ。

胸を揉まれて吸われて、下の方を擦られて、舐められて、指入れられて、三本目の足を入れられて……途中から自分で動いてしまった自分が恨めしい。

「本当に、本当ーに申し訳ありません！」

「じゃあ、家族全員にギーシュを襲って、犯してしまいましたって説明してくれるかな」

「無理！」

そりゃそうだろうな。親父殿は元帥なだけあって、強いし、母上はトライアングルの水メイジ。拷問されかねん。

更には一番目の兄、アルトリウス兄は、俺の事を随分と溺愛してたし、トライアングルの土メイジである兄上が勝てるわけが無い。一番上の兄は水のスクウェアだし。

「だって、だって、ギーシュのが、数の子天井でミミズ千本で……」

「誰がそんな生々しい事を説明しろといった。というか俺も味わってみたいよ、そんな名器」

未だに童貞だけどさ……。

「本当に、本当にすまない……レディ？を泣かしてしまうなんて……僕は、最低だ……」

「ふん……別に兄上は嫌いじゃないよ。いきなり俺の事を犯したのは腹立ったけどさ」

「え！本当？」

「今調子に乗りそうになったから嫌いになった」

「ああああ……」

撃沈する兄上。ちなみに正式名称はアレクサンドル・シュヴァリエ・ド・グラモンである。領地はまだ無いのである。騎士の称号は貰ってるけどね。

原作のギーシュをでかくしたようにすればいい。だが、原作のギーシュよりかおつむの出来はいいので、口説き文句も上手い。一番上の兄の方が上手い。父上は更に上手い。

土のトライアングルだから、十分に優秀な部類だし、体も鍛えてるし、杖剣での剣術も出来るし、馬術も出来る、頭もいい。良物件である。女癖が悪い事を除けば。

「兄上もさっさと婚約者でも作って忘れてください。俺も今日の事は忘れます。野良犬にでも噛まれたと思っておきます」

「いや、しかし……」

「じゃあ、責任とって結婚でもしてくれるか？」

「モチロン」

まさか即答されるとはな……だが、だが……嬉しい。家族愛が、男性としての、異性としての愛情に変わるのが理解出来る。

まさか、自分がこんなにも惚れっぽくて人生初の一目ぼれが同性とは思ひもなかった。

「フン……着替えるから目を閉じて」

「あ、はい」

素直に目を閉じたアレクサンドル兄の前に移動して、抱きついて唇を奪う。ヤッている間にも許さなかった唇を許す。

驚いて目を開けたアレクサンドル兄の口をこじ開けて、舌を絡ませる。唾液を交換し、混ざった唾液を飲み下し。

「責任、ちゃんと取ってよね」

「はい！」

まさか、自分がこんな女の子のような事をするとは思ひもなかった。

その後、アレクサンドル兄に命令を下し、俺の部屋から服を取ってきてもらった。全裸で飛び出すのは如何な物かと思ったが、気にしないでおく。

着替えた後は普通に生活。態々俺の里帰りに合わせて休暇をとってくれた兄上たちが全員集まり、家族が全て揃った日の晚餐に、アレクサンドル兄が切り出した。

「父上、この後、全員に話したい事があるのですが」

「ふむ……この場ではいけない事か？」

「はい。ゆっくりと出来る状況でないと……」

「分かった。では、夕食後に全員談話室に」

その後、夕食が終わった後に、全員が談話室に集合した。

「それで、話したい事とはなんだ？アレクサンドル」

「はい。まずは……」

アレクサンドル兄が俺へと目線を送る。なんか恥ずかしいぞ。

「母上に確認してもらいたいものがあるのですが……」

「何かしら？」

「えー……此処には兄上と父上もいますし……ちょっとここにきて下さい」

着替える場所。まあ、俺の私室に向かう道すがら話す。

「詳しい事や経緯は後で説明しますが……今の私は、男と女の両方の性別が混ざっている状態なのです」

「まあまあ、道理で前よりも可愛らしくなってると思ったら」

それだけ？そんな事を思いながらも、私室に到着し、服を脱ぐ。うう、同性(?)とは言え恥ずかしいぞ。

全裸になって見ると、やはり自分の手足や顔などがつるつるに毛が生えていない事が分かる。またにも毛生えて無いしな。息子さんは大分小さくなってしまったし。

「あらあら、小さい」

「母上、今の致命傷です……」

「いいじゃない。よく見せて」

そんな事をいいながら、俺の胸を揉んで乳首を摘む母上。感度が高い所為で感じてしまいそうになるのを我慢する。

「ひゃんっ！は、母上。ど、どこに指を」

「あら、ギーシュの女の子の部分」

「入れないで下さい！」

指を突っ込まれてちよっと痛かった。服を着直して、談話室に戻る。

「兄上、説明は終わりましたか？」

「話は聞いた。それで、どうだったのだ？」

「はい、確かに女の子でしたわ」

「そうか……しかし、自分の目で見ないと信じられん性質だな」

父上、鼻息が荒いぞ。母上に怒られてションボリしている父上はひとまず放って置く。

「して、一体何があって女子になってしまったのだ？」

「はい。実は……」

色々ごまかしをしながら説明をした。人間は死後精霊になる、土メイジなら土メイジが扱う土系統の精霊に。水メイジなら水メイジが扱う土系統の精霊に。

しかし、自分は四の系統全てを極めてしまったが故に、既に精霊に近い存在になってしまい、精霊には性別が無い為に、自分もまた性別の境界線が曖昧になっていると。

死後精霊になると言うのは思いっきり嘘っぱちだが、説明を簡単に進めるにはそれが一番楽なのだ。結果として、半分以上女になってしまったと説明した。

「なるほど……しかし、一体何時の間に四系統全てを極めたと言うのだ？」

「はい。学院に行っている間に、偏在を覚えられたら、今進めているプランが早く進む為、偏在を覚ええました。」

その後、水系統と火も極められるのではないかと思ひ極めたのです。今進めているプランは非常に難しい為、力が必要だったので」

「プランとな？あのゴーレムのようなものか？」

「似たようなものです。それについてはいまだ未完成ですので、時期に公開します」

「分かった。では、手紙で教えなかったのは何故だ？」

「実は……アレクサンドル兄上がつい暴走して、私を犯してしまつたのです。平たく言うと言強姦されました」

室内がシン……と静まり返つた。

「アレクサンドル。少しお話しようか？」

「兄さん、ちょっと訓練を手伝ってくれないかな。効率の良い殺し方を考えたんだ」

「ぎ、ギーシュ！助けてくれ！」

「アルトリウス兄さんに、ルキウス兄さん。アレクサンドル兄さんを殺すのは後にして。僕も殺すから」

「た、助かったのか……？」

「助かって無いと思うぞ」

ひとまず場を落ち着かせて、話を切り出す。

「それで、父上。兄上は私の貞操をついつい奪ってしまった責任を取ってくれるそうです。一体どのような形で責任を取るべきでしょうか？」

「打ち首」

「では、早速。ブレイド」

アレクサンドル兄が、ルキウス兄に押さえつけられ、アルトリウス兄がブレイドを構えて首を落とそうとする。即決過ぎるだろ。咄嗟に俺もブレイドを発生させて兄上の剣を受け止める。なんちゅうことするんじゃ。

「ギーシュ！止めてくれるな！」

「駄目です！」

一頻り打ち合った後、武装解除で兄上の杖を弾き飛ばす。武装解除と言っても鍊金なんだがな。兄上の腕を一時的に帯電させ、杖を反発させる。電荷した腕を治す。この二工程を一瞬で済ませるのだ。俺以外には使えない魔法だが、便利である。間違えると、地面から腕に落雷したり、腕が木端微塵になるんだがな。杖の素材によって出来ないし。

「打ち首が駄目ならば、嫁入りをするしかない。しかし、ギーシュはアレクサンドルの兄弟？だ。どうにもしようがあるまい」

「でしたら。父上の妾が産んだ女兒を兄上が見初めた。しかし、家柄の問題で嫁入りも妾にするのも無理。そこで、父上の家臣の誰か

の養子にし、家臣の娘と結婚すると言う形にすればいいのではないだろうか。

今は一人二役をし、その内、戦争が起こったら、その戦争で私は死んだ事にし、嫁入りをするというのはどうでしょうか？」

「ふむ……一応、無理はないか。アレクサンドルよ、よいのか？」

「はい！ギーシュは、そのお……アレだし、可愛いし、僕の事を理解してくれるだろうし、それに、レディを泣かせるなんて真似を僕が出来るわけが無い」

そんな風に、誇らしげに言って兄上は俺に笑いかけた。くっ、カッ
コイイじゃないか。思わず頬が熱くなる。

「ギーシュは……まあ、先程の考えはパツと考えたモノでは無いだろうし、今の反応を見れば返事は聞かずとも分かるか」

「は、はい」

ちくしょお、今まで全然気にならなかったのに、兄上の顔が恥ずかしくてロクに見れんぞ。

その後、娘が出来て嬉しいとか父上と母上がとち狂ったようになり、兄上たちにも頬にキスをされたり、抱き上げられたり、胸を触られて殴り飛ばしたり。

こうして、俺の里帰りは概ね平和に終わった。

春。使い魔召喚の儀式である。とはいふ物の、相変わらずフラフラの俺である。偏在を維持し続けて、精神力が回復したら、また新しく偏在を追加出来る事に最近気付いたのだ。

現在、工場は数千人の俺が作業を行っている。ペースが一気に数倍以上のアップしている。ちなみにだが、人数がいすぎて邪魔だと思ふ無かれ。

偏在は精神力が回復しないのだ。その為、順次追加しなくてはいいないのだ。以前は次の日になったら偏在を消して、新しく生み出していたのだが。

今は毎日千人くらい生み出せるようになった。ちなみにだが、キョウスケ型の俺とエクセレン型の俺は集中して思い浮かべれば、偏在で即座に生み出せる。

既にアルトアイゼンは完成して、現在は二号機を作っているところだ。ヴァイスリッターも一応の完成。試験運転は既に行った。大変だった。

というか、カーボンナノチューブを使ったから黒くなった金属を白く塗装するのが大変すぎた。途中で、表面の装甲を錬金で塗料に変えればいい事に気付いたが。

まあ、それはおいといて、俺の番が来たので、さっさと召喚をする事にした。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、”使い魔”を召還せよ」

銀の鏡が現れ、そこから猫が現れる……のだが、なんだね、この意味不明な魔力は。スクウェアメイジで言うなら、三十人分はあるぞ？他の奴等は感知能力が低いのか分かってない。コルベールとかタバサみたいな感知能力をしっかりと磨いている奴も、余りに強大すぎる魔力の所為で、気付いてない。

まあ、匂いになれたみたいなき感じだ。その所為で、魔力が一切無い子猫だとも思ってるんだろう。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

黒い猫を抱き上げ、キスをする。パチリっとな音が響き、全身にルーンが刻まれる。なんというか、人修羅というか正義の味方の魔術回路みたい。

それが収まると、猫が俺の肩に駆け上る。おお、なかなかいい気分。猫が肩に乗ってるなんて、いいじゃないの。

「君の名前は？」

『私の名はウルド。もしかしてだが、気付いていたのか？』

「まあね。君はどう考えても普通の猫じゃない。スクウェアメイジで言うなら、三十人分の魔力を感じるからね」

『ふむ……今回の主は中々に優秀なようだ。汝の名は？』

「私の名はギーシュ・ド・グラモン。人間としての垣根を走り幅跳びで飛び越えてしまった男だ」

『ほお……中々面白い人間だ。今までに見たどの人間よりも強大な魔力を持ち、精霊に好かれ、男としての境界を見失う寸前ではないか』

「まあ、ね。それで、君は何者だい？」

『私か。私はなんなのだろうな。何時しか私は存在していて、その時既に私は完成していた。私という存在は、生まれた瞬間から完結していたのだ』

「いや、そんな事を私に言われても困るのだがね……まあ、いい。ウルド、使い魔としての仕事は特に無い。私のペットのような立場で構わないぞ」

『詰まる所、やることがない？なら、何故召喚したのだ？』

「ぶっちゃけた話、使い魔を召喚しないと学校を卒業できないからだ。という訳で、俺に召喚されて不運だったね」

『なるほど。今回の主は中々に面白い』

「へえへえ、お褒めに預かり恐悦至極ってな」

俺の使い魔、猫のウルド。土とはちっとも関係ない奴だった。ちなみにだが、ルイズは才人を召喚したようだ。ギャーギャー騒いでたら分かるさ。そりゃあ。

まあ、どうでもいいか。俺にとってはどうでもいい話である。後でガンダールブのルーンを見せてもらおうとしよう。解析出来たら、どうにかなるやもしれん。

あと、俺が刻んだ使い魔のルーンについても解析はしてある。知性が無いものには知性を与え、喋る力を得る事が出来るルーンだ。猫の発声器官では人語は話せないのも、念話が与えられたという事だ。その後は教室に移動して、なにやらお話を聞く。面倒なので、ウルドとしりとりをして遊んでいた。

その後、ルイズの部屋へと向かう。窓をコンコンとノックし、鍵を

開けてもらって入る

「や、ルイズ。どうだった？」

「うん。予想通りよ。左腕に古代ルーンでガンダールヴって刻まれているのを確認したわ」

「やっぱりか。まあ、そうだと思ったからコレを持ってきたんだけどね」

抱えていた剣、それは俺が錬金で作った剣だ。硬化と固定化を掛け捲ったのでかなり丈夫だ。無骨な剣ではあるが、性能は高い。

「ひとまず、これ。一応は使えるだろうけど、ただの剣でしかないからな。ガンダールヴが武器を扱えたのは確かだけど、ルーンの力か本人の力なのかはわかってない。

伝説の使い魔だからって過信はするなよ」

「分かってるわよ」

「次。書物を調べてるうちに見つけた記録だけど、かつてガンダールヴが振るったとされる剣、デルフリンガーは魔法を吸収する力があつたらしい。

運良く見つかるとは限らんが、インテリジェンスソードだったらしい。調べてもらった結果、ビエモンの秘薬屋の近くの武器店にインテリジェンスソードがあつたそうだ」

「もしかしたら、それかもしれないわね」

「過信はよくないがね。さて、俺の名前はギーシュ・ド・グラモン。

君は？」

「平賀才人。なあ、此処は一体何処なんだ？何で俺はここに居るんだ？」

「国名を聞いてるならトリステイン。世界の名前を聞いてるならハルケギニア。君が何で此処にいるかと言えば、君が呼び声に応えたからだろ」

「そんなの俺は聞いてないって！」

「どうなんだ？ウルド」

『ふむ。目の前に鏡が現れてな、それに触れたらここにいたぞ』

「鏡に触れた時点でお前は呼び声に答えた事になってる。そこからへんで拒否権は無いらしいな……」

「なんだよそれ……」

「ま、安心しろ。衣食住の保障くらいはしてやる。だよな、ルイズ？」

「え？ええ！そ、そうよ。それくらいはしてあげるわ！」

どうやらするつもりはなかったようだ。やれやれだな。

「ベッドは……イル・アース・デル・鍊金！」

最初に骨組みを作る。次に想像だけでマットを作り、シーツも作っ

てやる。

「ま、こんなもんか」

「す、すげえ！魔法ってこんな事も出来んのか！」

「こんな事が出来るのはスクウェアのギーシュだけよ」

「スクウェア？」

「系統を足せる数だ。一つなら点のドット。二つなら線のライン。三つなら三角形のトライアングル。四つなら四角形のスクウェア。個人で出来る最高は四つだ。」

特殊な例になるが、王家の人間が二人で使う魔法に、ヘクサゴンスペルやオクタゴンスペルがある。こっちは攻城戦用の魔法だから、お披露目された事はない」

「合体魔法まであんのか！スゲエな！」

「見も蓋もなく言えば、合体魔法だね」

「じゃあ、ルイズはどうなんだ？」

「べ、別にいいじゃない。なんだって」

「あ、じゃあ。俺は帰るわ。んじゃあな」

巻き込まれそうなので、さっさと帰る事にした。その後、爆音が聞こえてきたのは気のせいだと思いたい。

部屋に戻り、作成中だったものを再び再開する。今作っているのは、エボニー&アイボリーと同じ、白と黒の拳銃だ。

DMCでスパイダが使用していたとされる二挺拳銃、ルーチェ&オンブラ。それを作っているのだ。アレクサンドル兄の為に。椅子に座り、何処までやったかを思い出す。

しかし座ると髪の毛が床につく……なので髪の毛を縛る。切ってもいいのだが、アレクサンドル兄が長髪の方が好きだといったら後悔しそうだしな……なんで俺はナチュラルに乙女の思考をしてるんだろ。

まあいいか。部品規格をディテクトマジックの改良魔法、ディテクトで調べる。ディテクトマジックは精神力、即ち魔力を探查する魔法である。ディテクトは単純な探查。

使用する際に、どういったものを探查したいか考えておけば、しっかりと探查可能なのだ。ゆがみが無いかを調べ直し、フレームをはめ込む。

続いて、俺のエボニー&アイボリーに使用している魔法陣とは別の物。更に制御がしやすいように改良を加えたものを刻み込む。俺のには刻めないが兄上の手に合わせたサイズだから、俺のよりも大きく出来るのだ。

更に制御がしやすいように土の精霊に制御を肩代わりしてもらう。風石ではなく土石を埋め込み、鍊金がしやすいように改良。風石は何処でも大量採掘出来るので便利なんだがな。

随分と過保護な設計に思えるだろうが、トライアングルメイジで無い限りは連続鍊金なんて難しいのだ。魔法陣を使っているからこそ連続鍊金が出来るが。兄上でも使いこなすのは難しいだろう。

後は細部を作りこむだけだ。固定化と硬化を、土石と魔法陣に干渉しないようにかけるのは難しいし。部品に歪みがあれば暴発してし

まう。

一個作るのに二週間は掛かるのだ。一流のガンスミスよりも速いが、魔法があるからこそだ。しかも彫刻とかもしてるからな。俺の物は無骨なもんだが、兄上は王都にいく事もあるのだ。

優美な彫刻を施しておかなければ笑われてしまう。エングレーブは何のタクティカルアドバンテージも産まないが、見栄っ張りの貴族には大切なのだ。

そう考えると何だか楽しくなってくるな。左右対称の模様を描き、後は刻むだけと言う所で眠りにつく。集中力が無いと、鍊金で彫刻をするのは失敗するのだ。失敗したく無いので明日やる。

「あゝー……眠い」

寝起きはいいが、機嫌は悪いギーシュです。コンデンセーションで水を集め、火で水の熱量を外に追い出す。身を切るほどに冷たい水で顔を洗って目を覚まさせる。

鍊金でバスタブを作り、近くの川から水の魔法で水を運び、水をたっぷり注ぐ。その後、火の魔法で暖め、湯船に体を沈める。

「あー……いい気持ち」

朝風呂ほど気持ちいいものはないな。体を温めた後、浴槽の中で頭を洗う。髪の毛が長いと洗うのも大変なのだが、やっていると楽しくなる。

泡立った髪を流し、泡で汚れた水は水の系統魔法で空中に浮かせておく。同時に複数の魔法行使が出来る俺だからこそ出来る技だ。

「はぁ……」

胸を見下ろして一つ溜息をつく。乳首も膨らんで、完全に女の子の胸だ。それはいい。だが、このサイズはどうにかならないものか。身長144センチ、B77W58H72くらい。確か、アンダーとトップの差でカップサイズを計るからアンダーが60くらいだからCかDはあるんだが、アンダー自体が小さいので大きくは見えない。やはり、アレクサンドル兄は巨乳の方が好きだろうか？って……俺は何を乙女してるんだ？さっさと体を洗ってしまおう。ちなみにだが、前世の日本人で144センチは11歳の平均身長だ。こっちは更に発育がいいので、十歳くらいに見られるのはザラ。

浴槽の中にボディーソープを注ぎ込み、体を洗う。女の子の体の洗いは前世で読んだエロ小説で学んである。実地で学んで無いのかよwwwwとか言うなよ。

一通り洗ったあとは浴槽から水を取り出し、浴槽の水を全て宙に浮かべる。そして、また川から水を運び空中で温める。綺麗な水で体を洗い、ボディーソープを全て洗い流す。

そして、今までに使った五百リットルほどの水全てを空气中に霧散させる。制御の練習になるので、毎日やってるのだ。

その後、体についた水を魔法で飛ばし、濡れた髪も魔法で乾かす。その後に服を着込み準備は完了である。朝食まで時間はあるように、余裕を持って起きたので、彫刻を済ませる事にする。

「ハー……よしっ」

集中する。一ミリもずらしてはいけないとばかりに。昨日に刻み込んだ細かい模様の部分を取り除くように。

「イル・アース・デル！」

そして、模様の部分が取り除かれた。しかし、これで終わりではないのだ。昨日のうちに錬金しておいた白銀を火の精霊に頼んで溶かす。

融けた金を一ミリに満たないサイズの溝に流し込む。そして、それを固着して凝固させる。それを全て終了させれば、彫刻部分は綺麗に輝く。

シアーやハンマー、グリップにも刻み、白銀を流し込んでいく。凄まじく神経を使う作業だが、人間は十五分程度なら極限状態を維持できるのだ。

「よし……完成」

頭がククラしてるが、見事に完成した。後は固定化と硬化を掛け捲るだけだ。三回ほどオクタゴンクラスの固定化をかけ、五回ほどオクタゴンクラスの硬化をかけた。

ちなみに、強度実験を試みた事があるのだが、オクタゴンクラスの硬化を三回かけた金属破片をニトロを満載した瓶の中に突っ込み爆破したが、傷一つなかった。

それくらい凄まじい硬化を掛け終えて、ルーチェは完成した。ルーチェは黒い拳銃なので、白銀を使ったのだ。ちなみにオンブラにはルビーを使うつもりだ。深い赤色のピジョンブラッドを。

白には赤が映えるからな。我ながら良い出来だと思ってる。パーツを仕舞い込んだらどれがどれだかわからなくなりそうなので、カバーだけをかけて食堂へと向かう。

「おはよう。マリコルヌ」

「おはよう。ギーシュ」

随分と痩せてしまったマリコルヌに朝食の半分を分け与えながら朝食を食べる。何事も程々が一番だ。

その後に、適当に談話をして授業になる……のだが、レベルが低い。魔法の授業は話しさえ聞いてりゃいいのだが、俺は全系統スクウェアなので今更覚えるまでも無いものばかり。

それとは別に筆記の問題もあるのだが、魔法のほうは先程言ったとおり覚えるまでも無い。そして、数学とかもあるのだが、数学のレベルは小学校卒業程度のものだ。ハルケギニアじゃ必要ないもんだし。

使えるからそれでいいと進化を忘れた種族のような存在なので、魔法の発生メカニズムすら知らないのだ。何故火が燃えるのか、風と水で氷を生み出すよりも、物理を知っていれば風と土で氷を作れる事も知らない。

歴史の授業が面倒ではあるが、そんなものそう滅多にあるもんじゃないので、授業中は適当にやっている。六千年の歴史があらうと、そんなもの糞真面目に記録してる奴が居るものか。

というよりも、前王が嫌いだった奴とかは、その王の政策とかを全部無碍にしたり、今までの記録を全て焼いてしまったりするのだ。ばかばか。

なので、歴史の勉強は結構少ない。ここ二百年ほどしか歴史は残って居ないらしいのだ。なので丸暗記しまえば楽勝である。二百年ぼっちの歴史、世界各国の千年以上の下らない歴史を覚えていた日本人としては楽勝だ。

授業中は寝てるか、新しい魔法を考えたり、水晶細工を作ったりする。最近では金細工も作っている。自分で使う物は自分で作りたい。

……乙女の思考が出てくるな。

そして、授業が終わり、昼食の時間。マリコルヌと談笑しながら、体重などをデイトクトで調べる。平均的な体重よりも多いが、問題

ないレベルだろう。

「諸君！決闘だ！」

と、唐突に食堂に声が響き渡った。そちらへと目を向けると、金髪碧眼の男が刀を背負った青いパーカーを着た少年に杖を向けていた。どう見てもサイトです。本当に有難う御座いました。頭がいてえ……ひとまず、ルイズに話を聞いてみる事にした。

「ルイズ、一体何がどうなってるんだ？」

「浮気を知られたあの馬鹿がサイトに決闘を申し込んだのよ……何で受けるのかしら……」

「ガンダールヴの力を見る良い機会じゃないか？ いざとなったら俺が止めるさ」

「頼むわ……」

風・風・風・風のスペル。インヴィジブル・エアを発動させる。俺オリジナルの魔法である。元々はトライアングルスペルのトルネードに更に一乗した魔法なんだけどね。

俺の精神力が馬鹿みたいに多いからこそ出来る芸当だ。光を屈折させる事が出来るほどの凄まじい速度の風で、下手に指を突っ込みと一瞬でもぎ取られかねない速度だ。

要するに、風の形を自由自在に整え、それを利用する事が出来る操作性の高い風の系統を利用した魔法だ。武器を隠したり、姿を隠したりと使用用途が多い魔法だ。

無論の事ながら、元ネタはFateだ。Fateの宝具で再現出来たのは、インヴィジブルエアにエクスカリバー、突き穿つ死翔の槍

ただだ。これ以外には再現のしようがない。

エクスカリバーはコンスベル、ライトだ。注ぐ精神力の量とイメージ次第で魔法は変化するので、ああいった妄想先がある俺にはイメージで変化する魔法は有利だ。

何しろ、エクスカリバーは所有者の魔力を集積、増幅、光に変換し、加速させて運動量を増大させ究極の斬撃として放つのだ。つまり、凄まじい光を集めればいい。要するにレーザーだ。

ちなみに、ライトは光で可視光線だ。即ち、光線なら何でも発せられる。紫外線、赤外線、放射線、ゲッター線、でも何でも発射可能だ。暗殺に便利だね。うん？ゲッター線は光じゃねえ？光は可視波長だけで、放射線も生物によっては光さ。

おっと、話を戻そう。兎に角、待機しておいて、常に発せられる魔法はコレだけなので唱えたのだ。一応、エアハンマーやエアカッターも停止できるのだが、その場での停止だからな。

そして、広場に移動する。フルボッコにされるサイト。心の震えが足りないんだろうか。暫くして吹っ飛ばされたので、仕方なくインヴィジブル・エアを解放する命令を出そうとしたところで、サイトが立ち上がった。

「下げたくない頭は下げられねえ……生きる為に必要でも、普段は下げなくちゃいけない頭でも！絶対に下げられない時があるんだよ！」

サイトが啖呵を切ると同時に、左腕のルーンが輝く。あれがガンダールヴの力……明らかに人間の限界を超えてる。目一杯精霊たちを使って強化を施した自分の体並みの性能だ。

凄まじい……アレが虚無の力。無限に成長を続ける現時点でスクウェアメイジ数千人分の己の現在の精神力をも超える莫大な精神力の持ち主であるルイズ、そしてそれを守るサイト……恐ろしい。

もしも、もしもだ。ルイズが四系統の力を使いこなせるようになって

たならば……敵う人間は存在するのか？ いや、下らない事を考えても仕方あるまい。

「アレが虚無の力。神の左手、魔法を操る小人ガンダールヴ……」

「強いわね……アイツ、確かラインの土メイジだったはずよ」

「土メイジは、メイジ殺しが一番組し易い相手だが、それでも戦闘経験も無い子供が倒せるような相手じゃない。

それに、アイツも俺の家系と同じく軍人メイジの家門。あのゴーレムも青銅製のしっかりとしたものだ」

「やっぱり、ガンダールヴね」

「勝ったな」

「ええ」

何だかエヴァっぽいぞ。勝ったな↓ああ。のやり取りくらいしか覚えて無いんだけどね。

それから、フルボッコになってしまったサイトをルイズの部屋に運んでやり、俺の魔法で治療してやった。酷いねこりゃ。

ちよっとした医学知識と人体構造を知ってる俺だからこそショボイ秘薬で治療可能だったのだ。ちなみにだが、ちよっとした医学知識とは何処をどうやったら殺せて、どこをどうやったら死なせないようになるか。

それから、各臓器の働き、パーキンソン病だとかテレビでよく出てくる病気の病状とかくらいだ。愛用サイトはWikipediaだったもんでね。

サイトの各臓器の損傷を治してやり、部屋に来る前に精霊に頼んで

作ってもらった水の秘薬をサイトにぶちまけて、最後にヒーリング。これで筋肉の超回復が簡単に済ませられる。

「よしっと」

「ありがとね。ギーシュ。秘薬の代金を払うわ」

「9エキュードいい」

「安すぎでしょ」

駄目だ。洒落が通じるわけがなかった。というか、ブロントネタ自体滅多に通じないし。秘薬の代金二百エキュードを受け取った。かなり安く感じるだろうが、結構高いんだぞ。

その後、俺は部屋に戻って再び錬金でオンブラを作る作業に戻ったのだった。

パーツ自体は作ってあったので、後は各部品のすり合わせと彫金、それから動作確認を行えばすぐに完成する。虚無の曜日までには完成させたかったので頑張ったのだ。

動作を確認し、柔らかい布で磨き直し、内部の硝煙の滓を取り除き、専用のホルスターに収めて、次に箱に収める。これで完成だ。

「喜んでくれるかな……」

既に手紙を送っており、虚無の曜日にアレクサンドル兄が休みを取ってくれるというので、一緒に出かける事となったのだ。ああ、俺、乙女してるなあ。

第五話（後書き）

ここまでが公開できる完成度です。話数が結構少なかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605r/>

懲りずにまた男の娘。ギーシュに憑依した変人の話

2011年3月28日18時42分発行